

日本ロシア文学会
第 56 回研究発表会

(2006 年 10 月 21 ~ 22 日・京都大学)

報告要旨集(最終版)

2007 年 5 月

(A会場)

- A02 秋草俊一郎 ナボコフの「自然な熟語」 「一流」のロシア語から「二流」の英語へ
A03 古川 哲 繁茂する革命 1920-30年代プラトーフ作品における世界の比喩としての植物
A04 中澤佳陽子 フセヴォロド・イヴァーノフの『ウ』における「新しい人間」のテーマについて
A05 佐光伸一 パステルナーク『ドクトル・ジヴァゴ』におけるモスクワのイメージ
A06 佐伯郁智 ロシア思想における性愛論とザミャーチン
A07 石原公道 最初のブルガーコフ伝記とその顛末
A08 河原法子 遊歩者の形象とドストエフスキー作品
A09 小出雅樹 『カラマーゾフの兄弟』における相対的認識論について
A10 木寺律子 『カラマーゾフの兄弟』における国家と教会の問題
A11 佐藤裕子 『作家の日記』におけるF.M.ドストエフスキーの女性論の諸相
A12 山路明日太 構成から見る「運命論者」再考
A13 中澤朋子 トレジアカフスキイによる作詩法の改革と18世紀の音楽
A14 角田耕治 カンテミールとロシア詩法の現在 『ハリトン・マケンチンの書簡』を読む

(B会場)

- B15 *Шатохина Г.* Прогноз перцептивных ошибок у японцев, изучающих русский язык
B16 *Клочков Ю.* Ознакомление с грамматическим материалом японских учащихся на уроке русского языка
B17 *Сивакова С.* Методический опыт оптимизации процесса обучения русской разговорной речи по пособиям японских авторов
B19 浦井康男 近代ロシア文章語形成期の諸作家における造語体系について
B20 今仁直人 ラジーシチェフの『人間論』再考
B21 覚張シルビア トルストイにおける18世紀の継承 『センチメンタル・ジャーニィ』と『幼年時代』
B22 水野晶子 ロシア語における身体の所有者マーカーとしての「y+生格」 与格との比較
B23 野口卓眞 現代ロシア語における 格融合 と 格階層 の相関性
B24 南條幸弘 動詞 **в** 活動体名詞 の結合に現れる活動体名詞の複数主格形と同形の主格対格形
B25 有泉和子 国境の認識 「北方領土問題」の始まり
B26 赤尾光春 帝政末期におけるボグロムとロシア知識人の反応
B27 越野 剛 歴史改変小説と帝国のイメージ

(C会場)

- C28 塚田 力 アレクサンドル・ドゥ(杜立福)長司祭の生涯
C29 草加千鶴 中世ロシアにおける慣習と裁判 「ルースカヤ・ブラウダ」を中心に
C30 山田徹也 ブィリーチカにおける現実性(リアリティ)の表現 死人のブィリーチカを中心に
C31 柚木かおり 1930-40年代ロシア農村の娯楽とバラライカ コストロマ州ネレフタ地区の調査
C32 江村 公 記録する眼 グラフ雑誌『建設のソ連邦』における「白海 バルト海運河」のイメージ
C33 平野恵美子 バレエ・リュス初期作品《火の鳥》研究 民話から生まれた「火の鳥」の妖艶な女性像
C34 小椋 彩 レーミゾフの文学テキストと「舞踊」
C35 前田しほ 現代ロシア女性文学と「フェミニズム」
C36 高柳聡子 1960年代の女性の散文
C37 上田洋子 シギズムンド・クルジジャンフスキイ『菜 **Книжная закладка**』研究
C38 近藤扶美子 フョードル・ソログーブ『創造される伝説』
C39 高橋沙奈美 ソヴィエトによる公的記憶転換の試みとその挫折
C40 大武由紀子 ソヴィエトプロバガンダポスターの政治性と芸術性 グスタフ・クルーツィスの場合
C41 白村直也 ロシア特別教育における就学指導・教育相談のあり方をめぐって

(D会場) パネルディスカッション

- D- 楯岡求美(企画責任者) ポータブルな祖国 ユダヤ・ディアスポラの文化とスラヴ
D- 野中 進(企画責任者) 「その後」のフォルマリストたち ロシア・フォルマリズム再考

【A02】ナボコフの「自然な熟語」「一流」のロシア語から「二流」の英語へ

秋草 俊一郎

バイリンガル作家ウラジーミル・ナボコフといえば、後期の実験的な作品の印象が強いため、従来の研究では彼の英語作品は文体の精密さにおいてロシア語作品を上回るという評価が英米文学者主導の研究の下でなされてきた。しかし、作家自身は『ロリータ』のあとがきで以下のように述べていた。

「自分の個人的な悲劇とは、[中略]私が自然な熟語や、何の制約もない、豊かで、限りなく従順なロシア語を捨てて、二流の英語に乗り換えねばならなかったことで、[中略]それさえあれば、生まれつきの奇術師が、[中略]自分だけの流儀で遺産を超越することもできるはずなのだ。」

この証言が物語っているのは、作家が自分のロシア語が英語よりも優れていたと思っていたということである。ドリーニンはそのロシア語時代の作品とその英訳について、ロシア語における「アリュージョンはその後ナボコフによって後期の作品の手法にもとづくセルフ・リファレンシャルな言葉遊びを用いた自作翻訳で置き換えられてしまい、オリジナルが持っていたロシアの遺産と結び付ける豊かな間テクスト性の伏流は捨てられてしまった」と述べてそれを説明している。ドリーニンはその「熟語 idiom」を当然のごとくナボコフのロシア語全体としてとらえているが、この発表ではそれを字義通り「熟語、成句」としてとらえ、そこに見いだされる作家の文体の特徴を探してみたい。というのも、「ロシア語」という言語から受け継いだものとしては、代替不能という意味において熟語、成句のほうがより一層本質的であると思われるからだ。

本発表の第一の目的は、自作翻訳を用いることで、ロシア語の作品においてナボコフの豊かな「自然な熟語」の独創的な使用方法を検証することにある。自作翻訳を精査することで「いかに訳したか」が理解されれば、「いかに書いたか」も理解されるというのが本発表の裏のテーマでもある。またこの方法を用いれば、その翻訳でナボコフが文体のメカニズムをある程度保持しながらも、より英語作家としての自分にそぐう形にそれらを作り変えていることも検証できる。ナボコフのロシア語を読むことで、その英語を正しく評価することが、本発表の第二の目的である。本発表ではナボコフの慣用句の使用法について示唆に富むと思われる例として「報せ」、『ディフェンス』、「目」など 30 年代のナボコフのロシア語創作時代中期以降の作品を扱う。

(あきくさ しゅんいちろう、東京大学大学院生)

【A03】繁茂する革命 1920-30 年代プラトーフ作品における世界の比喩としての植物

古川 哲

プラトーフ作品における神話的な要素についてはつとに指摘されてきた。たとえば、1920 年代末の農業集団化を扱った『土台穴』にはとりわけそのような要素が強い。巨大な共同住宅が竣工しないことをパベルの塔のモチーフで解釈したり、富農撲滅に黙示録的な要素を見出したりする先行研究がある。そのような、神話的な要素の一つとして、植物をあげることができる。たとえば、プラトーフの雑記帳に見られる「土台穴における死者たち、これは大地の穴にある未来の種子である」という一節は、福音書における麦の種(ヨハネ 12:24)の比喩と対応していると見てよいだろう。

プラトーフの作品において植物がどのように現れてくるかということは、この小説家における想像力の質を検討するうえで極めて興味深いテーマとなる。別の文脈では、植物が人間の操作に従うものとして扱われることもあるからだ。たとえば、1930 年代末に確立されソ連の農業に大きな影響力を持ったルイセンコの理論 獲得形質は遺伝する は、植物を人間の力によって変革できるという確信に基づいている。それに対して、プラトーフにおいては植物が、人間の操作の対象というよりは、自律的な秩序を持つものとして現れてくる。そして、そのことは、革命に関する彼の考え方も密接な関係を持つことが予想される。

ここで問題となっているのは、現実にある植物そのものではなく、プラトーフの想像力が植物に触発されることでそこに何を見出していったか、言い換えれば、プラトーフにおける「植物的なるもの」なのだ。そして、想像力の源としての、プラトーフにおける「植物的なるもの」の考察のために、プラトーフが植物に言及する箇所が検討される。

今回の発表では、1931 年に発表された中編『ためになる』を主に検討した。『ためになる』においては、世界は、展望可能なものとして捉えられてはいない。そのような視線は、重工業的な計画性では処理できない対象として植物を扱う中から培われてきたものといえる。そのような態度の中で、世界全体が、「植物的なるもの」として扱われることになる。それは、人間がその実現のために関与できるが、最終的には待望するしかないような対象である。

(ふるかわ あきら、東京外国語大学大学院生)

【A04】フセヴォロド・イヴァーノフの『ウ』における「新しい人間」のテーマについて

中澤 佳陽子

フセヴォロド・イヴァーノフの長編小説『ウ』のプロットは、ネップ期の残滓的な存在を、第一次五カ年計画の時代に適合する模範的な労働者へ改造するという計画をめぐって展開する。つまり、この計画の大枠からは、改造された「新しい人間」が指すものとは革命前、もしくはネップ期の社会の人間とは全く異なる共産主義的人間であると考えられる。しかし、批評家のアレクサンドル・エトキントは、テキストの細部から、『ウ』における「新しい人間」像に革命前の時代の、宗教的な思想とのつながりを見出している。そもそもエトキントは、銀の時代の思想がスターリン時代の全体主義に受け継がれたという観点を持ち、スターリン時代に書かれたイヴァーノフの『ウ』を自分の論の例証の1つとして論じている。報告者はイヴァーノフ自身に、革命前の宗教思想がスターリン時代の全体主義に受け継がれたというエトキント的な観点があったと見なし、2つの「王冠」のイメージの分析からその点を明らかにしようと努めた。

2つの「王冠」のうちのまず1つは、「アメリカの皇帝」の王冠というイメージである。もう1つの「王冠」のイメージは、この作品舞台の遠景としてしばしば言及される、爆破されて荒廃した姿をさらしている救世主キリスト寺院のドームである。

この2つの「王冠」をめぐるエピソードの細部は、ヴラジミール・ソロヴィヨフが『神人論』で語った、人間は神から離れた後に再び神と再結合し、「全一」態を達成する、というプログラムを暗示的に語っていると考えられる。つまり、チェルパーノフの語る人間改造の計画と、2つの「王冠」のイメージが並行して描かれていることは、一見、新政権によって否定されたように思われる革命前の古い共同体思想と、新たな共同体思想が連続しているという作者の観点を示している。

ただし、『ウ』は全体に風刺的な色合いが強く、集団的な「新しい人間」という思想はアイロニーを持って書かれている。登場人物のチェルパーノフは結局詐欺師で、彼の語った人間改造の計画というものは全くの作り事であったことが判明する。また、「全一」的な人間になることを象徴していると考えられる「アメリカの皇帝」の王冠は、結局見つからないままに終わるのである。

(なかざわ かよこ)

【A05】パステルナーク『ドクトル・ジヴァゴ』におけるモスクワのイメージ

佐光 伸一

本報告ではボリス・パステルナークの長編小説『ドクトル・ジヴァゴ』における都市モスクワの表象について検討した。この作品では革命、戦争などの歴史的な事件を通したリアリスティックな同時代のモスクワ描写が行なわれると同時に、モスクワをロシアの使命や運命の担い手という象徴性を込めて提示している。

この作品の持つリアリズムは彼が指向した19世紀ロシア文学と、象徴性はこの作品の大きなモチーフであるキリスト教と深く関係する。

まずリアリズムについては、パステルナークは同時代のモスクワのさまざまな社会・文化カテゴリーを同時に描くことで、19世紀ロシア文学の古典を喚起させ、この作品をロシア文学史のコンテクストにおいて読むことを促し、その結果ロシア文学とソビエト文学との継承性を示す。

さらに象徴性であるが、モスクワを3次元の超えた象徴的空間として表象する。それはジヴァゴ自身の生活やロシアの歴史における重要な事件がモスクワの片隅の同じ場所で偶然起こるなどリアリズム小説とは異なる空間を創造している。さらに空間軸だけでなく時間軸も通常の時系列的で因果的なものでなく、主人公の意識によって体験される長さの異なる時間が創り出されたり、同じ時代を生きる複数の主人公の物語を並行して語り時に交差させたりとパステルナークに固有の時間の流れを生み出している。

このような特殊性はパステルナーク自身のことばにもあるようにこの作品を福音書に基づき執筆したからに他ならない。宗教学者ミルチャ・エリアーデは日常的な時間を「俗な時間」、超自然的、超歴史的な時間を「聖なる時間」と区別している。『ドクトル・ジヴァゴ』における同じ時間の流れから「俗なもの」にも「聖なるもの」派生しうる時間軸の設定、それは宗教的時間と深い関わりがある。『ドクトル・ジヴァゴ』の中では新約聖書の日常的エピソードの重要性と、キリストの出現により初めて人間が歴史の中で生きるようになったという精神の不死性が繰り返し強調される。19世紀長編小説のようなリアリスティックな描写を、象徴的イメージと交錯させることで、ロシア精神の不死性を表現している。そして「第3のローマ」としてのモスクワの再生により、革命後の荒廃したソビエトからのロシアの精神性の復活へと希望を託してこの小説は締めくくられる。

(さみつ しんいち、北海道大学)

【A06】ロシア思想における性愛論とザミャーチン

佐伯 郁智

十九世紀末から二十世紀初頭にかけてのロシアの思想界において、性愛に関する問題が重要な論題となったことが知られている。一方、ザミャーチン(1884-1937)においても性愛のテーマが大きな位置を占めていることはつとに、また重ねて指摘されてきた。先に述べた議論と作家のそうした側面との関連について、論じられたことがないわけではない。しかしそれは概して、性愛の問題への強い関心という共通点を指摘するにとどまる、大まかのものであったといえる。

本発表においては、ザミャーチンにおける性愛の問題が、そうした同時代およびそれに先行するロシアの性愛論の盛り上がりを受けるものであることを確認し、さらにそうした議論内において対立した論点がザミャーチンにおいて取り入れられ、かつ作家によりそこに独自の展開が付されていることを明らかにする。

この時代のロシア思想における性愛論のうちザミャーチンとの関わりで重要となるのは、伝統的キリスト教会が「無性・無肉」を称揚し、その性愛観が禁欲的に過ぎると批判する一群の主張である。しかし性愛の復権を訴えるという共通の出発点から発しながらそれは、互いに相容れない二つの性愛観に帰結することになる。すなわち、B.H. ソロヴィヨフ、ベルジャエフに代表される、性愛において疎外と孤独を知らない個の回復の可能性を見る「個の性愛論」と、ローザノフに結び付けられる、性愛に基づく生殖のうちに個の相続をも認める「種の性愛論」の二つである。

本発表では、具体的には『われら』、『洪水』というザミャーチンの比較的知られた作品における性愛の諸相を、上の二つの性愛観の相克として分析する。そしてその相克がローザノフ的な種の性愛の優勢に結果することが示される。他方の個の性愛論への懐疑的視線はここで取り上げた小説作品におけるその取り扱いのほか、それが論じられる際に用いられたソフィア、両性具有といったキー・イメージをザミャーチンが自らの評論において批判的に言及している点を指摘することでも確認されよう。ただ、ローザノフによって肯定される種の性愛が、その結果として幸福な家父長的家族を想定するのに対し、ザミャーチンにおいては伝統的な家族の維持はすでに不可能なものとして描かれる。このザミャーチンにおける家族の不可能性の意義についても検討する。

(さえき ふみとも、東京大学大学院生)

【A07】最初のブルガーコフ伝記とその顛末

石原 公道

1940年2月初旬、医薬効なしと知れた時、カチャーロフ、タラーソフ、フメリョーフ等の著名な俳優たちが、ソヴィエトの半ば未公認の作家、劇作家ミハイル・ブルガーコフに生きる希望を与えるべく、秘書を通してスターリンに書簡を送った。その結果ソヴィエト作家同盟書記長ファジェエフがブルガーコフを見舞ったが、ブルガーコフは3月10日死去。11日作家同盟文学基金、モスクワ芸術座、ポリショイ劇場による無宗教告別式、12日葬儀。14日ブルガーコフ文学遺産に関する代表委員会創設。15日文学新聞、写真と死亡記事(署名作家同盟幹部会)、その後諸紙が委員会創設を報じ、委員には未亡人工レーナ、親友ポポフ、演劇批評家マルコフ等10名が挙げられた。結局この会は任を果たさず、立ち消えとなるが、予定された作品集の伝記をポポフは40年中に書き、未亡人に渡した。しかしその伝記は未亡人の意に染まなかった(彼女の編纂に関わる1988年『ブルガーコフの回想録』に未収録)。発表は48年後のローゼフとペチョーリン編『ブルガーコフ書簡集』となった。この伝記は同時代人(1年年下)で親友、哲学者、文献学者(夫人がトルストイの孫で、プーシキンドームでトルストイ、ドストエフスキ、チェーホフ等の全集の仕事に参画)によって書かれたもので、その意義を確認することはブルガーコフ学にとって必要である。ちなみに2003年に二人の書簡集も刊行されていた。

そしてこの伝記をエレーナが忌避したという事実から考えてみると、その記述にそれらしい兆候3点を取りあえず読み取ることができ、最終的には『巨匠とマルガリータ』のテキスト生成とも関わってくる問題だと思われる。

第1には1924年の自筆履歴をさらに具体化した「1920年2月15日精神的挫折から永久に医学から離れ、文学に専念」という記述をエレーナは認めなかった。

第2に『逃亡』執筆に関わる、前妻リュボフィ・ベロゼルスカヤの「多大なる助力」という記述も気に染まぬものでもあったろう。

そして第3にポポフが読んだ『巨匠とマルガリータ』のテキストはどのようなものだったのか、という問題がある。この伝記で「ほぼ10年にわたり……運命の病気の始まりの前に完成することに成功」と記されたテキストはエレーナにとってはそうではなかった。この問題をエレーナの側からばかりでなく考えておくことも必要であろう。

(いしはら きみみち、早稲田大学大学院生)

【A08】遊歩者の形象とドストエフスキー作品

河原 法子

フランス語で街をぶらぶら歩きまわる人間を意味するフラヌール(flâneur)という語は、ロシアでは 19 世紀に用いられ始め、フラニョール(фланер)という語があてられるようになった。ドストエフスキー作品でこの語は『主婦』や『罪と罰』等で用いられている他、この語が直接使用されていない場合でも、目的もなく都市をさまよう遊歩者のような主人公がしばしば登場している。ドストエフスキーの初期作品における遊歩者たちは、周囲の様子を仔細に眺める観察者の役割を果たしており、小説では主人公として、フェリエトンでは語り手として描かれている。小説の主人公である遊歩者は、都市の様子やそこから受けた印象を語るフェリエトン作家と同じ役割を担われているのである。

一方、観察者でもある遊歩者の姿はポーの『群衆の人』やディケンズの『骨董屋』にも描かれていた。また、40 年代にロシアで流行した「生理学もの」にも都市へのまなざしを見ることができ、こうした小説や雑文などに見られる都市へのまなざしは、急激に発展する都市を捉え、意味づけようとするものだった。ドストエフスキーの描いた遊歩者もまた、このような都市へのまなざしを共有していると考えられる。

さらに後期作品では、物思いにふけりながら街をさまよう主人公の姿が顕著になる。放心状態で歩く主人公たちは、周囲の様子を気にもとめず、街をさまよいながら自分の悩みに没頭しているが、彼らのこのような様子からは、都市が自分の部屋と同じように体験されていることがわかる。都市の雑踏は、群衆が集う賑やかな場所であると同時に見知らぬ人々の間で孤独を感じさせる場所でもあるために、部屋のような役割をも果たしているのである。しかし、街路は実際の部屋のように完全に外界から閉ざされることはなく、主人公に偶然の出会いをもたらす、その後の運命を変えることもある。偶然の出会いと深い物思いという、後期作品における遊歩者の特質は、都市であり私室でもある両義的な空間によって支えられているのであり、孤独であると同時に孤独ではない都市の両義性が、主人公を街路へと招くのだと考えられる。

ドストエフスキーが描く遊歩者の姿は、40 年代と 60 年代以降とで大まかにわけることができる、都市へのまなざしや群衆の中の孤独などの時代に即したテーマと、夢想家という独自の要素が結び合わされたものとして捉えることができるだろう。

(かわはら のりこ, 北海道大学大学院生)

【A09】『カラマーゾフの兄弟』における相対的認識論について

小出 雅樹

『カラマーゾフの兄弟』の根底には、相対的認識論とでも呼ぶべき詩学があるように思われる。この意味するところは、ある認識は単独で意味を持つのではなく、対立するあるものとの相関関係、相互作用によってはじめて生まれる、ということである。たとえば「善」という認識ならば、「悪」という異なった性質との対比(差異)によって生まれる。したがって「絶対的」な認識というものはなく、また両項の相関関係と相互作用によってその位置はそのつど変化し、入れ替わる。

またこの認識論から導き出されるもうひとつの側面は、認識における「差異の必要性」である。たとえば「滑稽なもの」は「そうでないもの」(真面目、深刻など)との区別から生まれるが、逆に言えば、この「そうでないもの」は、常に対比される認識と共にあらなければならない。差異がなくなると認識もなくなる。

『カラマーゾフの兄弟』の作品自体の中で、以上のような相対性の立場を示唆する言及が、小説の登場人物の口を借りて、いたるところでなされているのに注目したい。これをふまえて、この小説における相対的認識の原理、「差異の必要性」、「意味の可変性」に関して検討したい。さらにその上で「相対性の克服」というテーマについて分析する。

まず大審問官は、絶対的な善の基準を捏造することによって、人々から相対的認識論を秘め隠すことを主張する。彼は、「唯一絶対の旗印」、つまり「中心への欲望」による階層的二項対立のもとに人々を欺きつつも、そのことによって相対性のくびきから彼らを逃れさせようとする。

一方ゾシマ長老は、「すべては大洋のようなもので、たえず流れながら触れ合っている」と述べる。相対的認識論の原理は、言語による極めて恣意的な分節化にある。しかし、この世界はそもそも「大洋」のように、区切ることのできない一つのものであったら、たとえば、「自分」と「小鳥」が本当は区別されないものであったら、ゾシマの兄が小鳥に赦しを乞うのは、他者を自己から区別してしまったことを詫びる身振りであり、またその罪のつぐない、すなわち自己と他者の区別の解消ということの意味するのではないだろうか。このことは、他にも、食うものと食われるもの、迫害者と犠牲者などといった差異の解消とともに、キリスト教の課題としてこの小説に組み込まれている。

(こいで まさき, 北海道大学大学院生)

【A10】『カラマーゾフの兄弟』における国家と教会の問題

木寺 律子

『カラマーゾフの兄弟』の前半部分において、イヴァン・カラマーゾフは修道院で国家と教会の問題に関する自分の思想を語る。イヴァンによると、裁判の問題において国家と教会の間の妥協は厳密には不可能であり、教会は国家の一部であるべきではなく、あらゆる国家が教会に同化すべきである。知的ではあるが若いイヴァンは、一切を教会とするという彼なりの高い理想を述べるのであるが、犯罪者を教会から破門するといった発想は過激で非現実的である。それに対してゾシマ長老は、現在でも教会は国家によって罰せられる犯罪者を破門せずに助け、犯罪者たちは教会に対して罪を自覚するのだと説明する。イヴァンは思想的な疑問から神の調和を否定しており、信仰を持っていないはずであるが、その一方で教会の高い権威を重視し、教会の統治機構として仕組みを重視している。イヴァンは犯罪者は破門し、この世界から追放すべきという考えを論文に書くことで、信仰を持っていない自分自身を共同体から疎外し、自分自身の立場を追い詰めているのである。こういったイヴァンの思想展開上の矛盾は、イヴァンが父フョードル殺害の事件の後、自分が犯人であると思いつめる原因の一つを作っている。修道院における国家と教会の問題についてのこの論争は、罪の問題を宗教の側、教会の側から考えたものである。

父殺しの事件の後、小説の後半では、予審判事、弁護士、陪審員など、司法制度改革後の仕組みにのっとっている様子が詳しく描写される。罪の問題を司法制度改革後の社会状況から捉えた、いわば国家の場面である。ドミートリーの裁判で弁護士フェチュコーヴィチがロシアにおける裁判のあり方を語り、刑罰のみならず精神的、宗教的な意味での救済が必要であることを訴えるが、これは、ゾシマ長老の話と同じテーマである。しかし、フェチュコーヴィチは自分の名声を意識しながら弁論を行うものの、無罪を勝ち取れない。改革以後、裁判について新聞、雑誌に書かれるようになり、裁判は傍聴人に公開されるが、それによって人々が興味本位で裁判に望む様子が如実に現れる。こういった新しい裁判制度ならではの問題点は、宗教的な罪の認識と重なるものである。

(きでら りつこ、大阪外国語大学大学院生)

【A11】『作家の日記』における F.M.ドストエフスキーの女性論の諸相

佐藤 裕子

ドストエフスキーの『作家の日記』には、作家の思想を読み解く上で重要な、政治・社会評論や文芸批評、回想や告白、宗教論、また、随筆および短編小説等が収められている。盛んな時事批評の中で社会への発言を常に意識していた作家は、当時のアクチュアルな問題のひとつとして、女性論も何度か取り上げている。トピックだけでも、「確実な民主主義。女性」、「ふたたび女性について」、「現代女性に恩恵を受けた者の一人」、「未来のロシア女性の確かな運命」等がある。また、ジョルジュ・サンドの追悼文に見られるこの女流作家への傾倒と賞賛、プーシキン記念式典における講演でのヒロイン論からも、ドストエフスキーが、女性の特性と可能性に特別な関心を寄せ、新たな価値を見出していたことがわかる。短編小説『おとなしい女』の若いヒロインも、処女作から作家が注目していた形象の系譜につながり興味深い。一方、『作家の日記』を契機とする読者からの手紙は、女性からのものも多く、作家はそれらすべてに目を通し対話の姿勢をとっている。

当時の19世紀後半のロシアにおける女性のおかれた現状も視野に入れ、『作家の日記』に記された、ドストエフスキーの女性論を分析する。

なかでも、以下の点の確認作業を行う。1)陪審員制度の裁判において、女性が被・加害者となる事件(DVや児童虐待)の審判に対する作家の弁論、2)女性と教育に対する意見(女性の高等教育、母として子に何語を学ばせるか、乳母の役割等)、3)ドストエフスキーにとってのジョルジュ・サンドについて、4)プーシキン講演でのタチヤナ論(土壌主義)、5)『おとなしい女』と女性の自殺について、6)前述以外の点で、『作家の日記』中に見られる「女性」や「母」に関する形容詞の使われ方とその文脈。

結論として、現実社会で起こる事件に注目し続けた作家ドストエフスキーは、ロシアの将来を見据え、今後重要となる女性や子供の人権に、『作家の日記』の中で積極的に光を当て発言したと言える。女性の戦争での役割賞賛といった問題点も見られるが、しかし、あくまでドストエフスキーの肯定的な女性観は、タチヤナ論に見られるように、民衆の大地に根差した母性に集約されていた。

『作家の日記』の中で、ロシアの女性の向上が多くのものを救う、そう繰り返して語るドストエフスキーの女性論の諸相を考察する。

(さとう ゆうこ、法政大学)

【A12】構成から見る「運命論者」再考

山路 明日太

レールモントフの『現代の英雄』については多くの研究者が「何か明らかにされていない、最後まで言い尽くされていない、捉えがたいもの」(Э.Герштейн)を感じている。また主人公ペチョーリンについては「小説の初めに我々の前に現れたときと同じ、不完全で不可解な人物のまま我々の前から姿を消していく」(В.Г.Белинский)とも言われる。こうした小説の「捉えがたさ」の一端は、最終章「運命論者」を単独で解釈する場合と、小説全体におけるこの章の位置づけを考慮する場合とで、読者が主人公の人物像や生き様について食い違いを感じる点にあると思われる。

本発表ではそれぞれの解釈を比較した上で、小説構成上の位置づけを重視する観点から「運命論者」について考察した。このような視点から見ると、作者の主人公に対するアイロニーはなお一層強いものとなり、レールモントフが執筆当時に達していた心境の転換という点からみても、適当なものと思われる。

従来から「運命論者」は他の章とは切り離され単独に論じられる傾向が強い。そうした解釈の中では、章末でペチョーリンの出した運命論に対する立場表明を「意志による運命の克服」と肯定的に捉え、主人公の「将来への展望」を読み取ることが最も妥当なように感じられる。

だが「運命論者」を小説全体の位置づけの中で考察すると解釈は異なってくる。「運命論者」は構成上最後に位置づけられているが、時系列上主人公の人生はその後も続き、克服されたはずの運命がなお彼を苦しめているかのように見える。この観点から見れば、主人公の生き方に対するレールモントフの皮肉な眼差しは、このような小説構成に如実に表れているといえる。

本発表においては、小説の構成と時系列とを対比した。そして構成上「運命論者」を最後に置いた意味について考察し、この章と時系列上再構成された前後の出来事(「公爵令嬢メリー」、「ベーラ」)との繋がりを解明しようとした。またレールモントフの創作活動前期と晩年の詩作品とを比較検討することで、彼が『現代の英雄』執筆当時達していた心境の転換についても例証した。それにより、作者が「時代の英雄」ペチョーリンを完全に相対化しており、一見最終的に見える主人公の「運命に対する結論」をもその小説構成によって裏切っているということを裏付けようとした。

(やまじ あすた, 北海道大学大学院生)

【A13】トレジアコフスキイによる作詩法の改革と 18 世紀の音楽

中澤 朋子

18 世紀初頭に行われたロシア作詩法の改革についてはもうすでに多く議論がなされており、自明のこととして語られることが多い。しかし、B.K.トレジアコフスキイ(1703-69)によって唱えられたとされる「音節力点詩法」という概念が、そもそもどのような経路を辿ってもたらされたものなのか、彼がいかにして「音節詩法」に「力点詩法」を組み合わせたという着想を得たのかについては、じゅうぶんな議論がなされていない。

今日では、「音節詩」以前にも存在していた民謡などの口承詩の詩形式についても多く研究されるようになってきた。他方、20 世紀初頭以降のロシア詩人たちによって書かれている一見すると「音節力点詩法」の諸形式のどれにもあてはまらないように思われる作品の「形式」についても、現在のロシア詩の研究では解明されるようになってきた。このように、今日では「力点詩法と音節力点詩法が共存している」(Гаспаров М.Л. Тоническое стихосложение // Литературная энциклопедия терминов и понятий. Изд. «Интелвак»: М., 2001. С.1076)とみなされるようにさえなっており、「音節詩法」と「力点詩法」という詩形式の短絡的な対比も再考を要する段階となっているのである。そうなれば、諸単語における強力点の位置を生かし組み合わせで作られる「力点詩」の形式について再検討して見る必要があり、そしてここで上に挙げた本発表の問題提起 トレジアコフスキイはどこから「力点詩法」を取り入れてロシア詩を作ろうと考えたのか という問いが、ある一定の意義をもちはじめにちがいないのだ。

たとえば、彼が書いた「詩」のなかには旋律をつけられて歌われていたものも多くあったことが知られている。18 世紀はロシアの音楽文化もまた大きな進展を見せた時代であるとされ、このことをふまえつつ、トレジアコフスキイの詩が同時代の声楽と密接に結びついていたという事実を考慮に入れながら、本発表では、彼がいかにして「音節詩法」に「力点詩法」を組み合わせるといった着想を得たのかについて探る。

(なかざわ ともこ, 早稲田大学大学院生)

【A14】カンテミールとロシア詩法の現在 『ハリトン・マケンチンの書簡』を読む

角田 耕治

プーシキンが四脚ヤンプを用いて詩を書き続けたというイメージ(このイメージ自体謬見だが)がもつ「安定感」はどこから来たのか,と考えたのが発端だった。「鎖につながれた犬が世界で一番自由である」と言ったのはサルトルだったか,詩が犬で詩法が鎖だとすれば,二十世紀のロシア詩学は「詩脚理論」に物言いをつけて音節アクセント詩法が金の鎖ではなかったことを強調する。

詩脚は「アクセント音節と非アクセント音節とが交替する規則的な組合せ」と定義され,これが反復して一詩行となる。元「足,足の裏」を意味するロシア語 стопа は英語 step などと同根だが,詩法用語としては翻訳借用語であり,古典古代(希語 ποῦς, 羅語 pes)や近代ヨーロッパ各国語(仏語 pied, 伊語 piede, 英語 foot, 独語 Versfuß)の「詩脚」がいずれも「足」をも意味する語であることに対応する。つまり語源的には「詩の一行を何歩で歩く」というコノテーションがあると思われる。

Стопа が「詩脚」の意味で用いられ始めた例として,チェルヌイーフの語源辞典が В.К.トレジアコフスキの次に挙げているのが,А.Д.カンテミール(1708-44)の『ハリトン・マケンチンの書簡』(1743)である。

そこにはトレジアコフスキ(1735)と М.В.ロモノソフ(1739)の作詩論の要諦であった詩脚をまっ向から否定する発言がみられる。代って数量韻律 метр の基準となるのは音節詩に特徴的な句切れである。しかしカンテミールの発想は純音節詩の規範には収らず,随所にアクセント詩法への傾斜をみせる。報告では,従来の研究が等閑に付してきたカンテミールの作詩法がもつ特異性を解明し,これが志向する詩の音調の復元を試みた。『ハリトン・マケンチン』を検証することにより,「ロシアにおける音節アクセント詩法 = 詩脚詩法 стопосложение」との固定した見方に対しては,詩が自由であるための可能性がそれだけではないことが示唆されただろう。最終的には,В.В.マヤコフスキ,М.И.ツヴェターエヴァらによる二十世紀のアクセント詩法とははたしてなんだったのか,ということまで触れた。

(つのだ こうじ, 早稲田大学大学院生)

【B15】

Прогноз перцептивных ошибок у японцев, изучающих русский язык

Шатохина Г.

Зная строй фонологических систем двух контактирующих языков, лингвист может предсказать сферу потенциальной интерференции, что, в свою очередь, послужит основой для научных рекомендаций по ликвидации акцента при обучении произношению, а также при обучении аудированию на неродном языке.

Хотелось бы подчеркнуть, что данные бинарного сопоставительного анализа двух языков должен хорошо знать учитель.

Сопоставление с родным языком, используемое непосредственно на уроках русского языка, не всегда дает желаемые результаты: оно зачастую не снимает, а, наоборот, усиливает интерференцию. Интерференция для учащегося снимается не путем сопоставительного анализа двух языков в ходе самого учебного процесса, а путем упражнений и инструкций, составленных с учетом трудностей изучения русского языка с точки зрения изучающего.

В фонетическом плане сопоставление японского и русского языков интересно тем, что фонетические системы этих языков достаточно далеки друг от друга.

В докладе будут приведены основные различия русской и японской фонетических систем, рассмотрены черты японского акцента в области гласных и согласных (на уровне порождения и восприятия японцами русской речи).

Результаты настоящего исследования можно использовать в теоретических курсах общего языкознания и для усовершенствования методики преподавания русского языка как иностранного (курс лекций для преподавателей РКИ).

Данная работа может стать отправной точкой для ряда новых работ по японско-русской интерференции.

(東(ひがし)シャトヒナ・ガンナ)

【B16】

Ознакомление с грамматическим материалом японских учащихся на уроке русского языка

Клочков Ю

Конкретные способы работы с грамматическим материалом на уроке устанавливаются в зависимости от ряда факторов. Важно учитывать, какого рода действия и операции будут выполнять японские учащиеся с предлагаемым материалом в процессе речевого общения на русском языке и какова цель введения грамматической единицы, отражаемая в используемом учебнике или учебном пособии.

В методической практике при работе с японскими учащимися применяются следующие основные способы ознакомления с новым грамматическим материалом:

- 1) объяснение преподавателя либо объясняющий текст учебника;
- 2) разнообразные средства наглядности (схемы, таблицы, теоретические комментарии, предметная, картинная наглядность, моторно-двигательная и ситуативная наглядность);
- 3) использование специально подобранных примеров (их наблюдение и анализ), контекста, речевых образцов, применяемых как для наблюдения и анализа, так и выполнения действий по аналогии;
- 4) презентация нового грамматического материала может осуществляться в процессе выполнения определенных упражнений, направленных как на выработку, так и закрепление фонетических и одновременно грамматических навыков японских учащихся на начальном этапе изучения русского языка.

Значительное различие в системах русского и японского языков, наличие многих новых и трудных для японских учащихся языковых понятий повышает важность объяснения. В то же время при работе с японскими учащимися трудно и даже невозможно отдать предпочтение какому-либо одному способу ознакомления с новым грамматическим материалом. Обычно способы презентации в преподавательской деятельности применяются комбинированно.

(クロチコフ・ユーリー, 駒澤大学)

【B17】

Методический опыт оптимизации процесса обучения русской разговорной речи по пособиям японских авторов

Сивакова С.

Великий русский педагог К.Д. Ушинский говорил, что при хорошем учебнике и благоприятной методике и неопытный преподаватель может быть хорошим, а без того и другого даже лучший преподаватель не выйдет на настоящую дорогу.

В данном докладе речь идет о:

- A. 10-летнем методическом опыте работы по пособию Д. Сато: «Вводный курс русского языка. Новая редакция», изд. NHK, которое неизменно получает высокую рейтинговую оценку учащихся. Приводится краткий сравнительный анализ данного учебника с существующими аналогичными пособиями других японских авторов.
- B. Показано как авторская методика преподавания влияет на активность и заинтересованность учащихся, ибо она,
 - 1) ориентирована на социально-культурную сферу деятельности студентов;
 - 2) учитывает основные мотивы выбора русского языка: интерес к русской культуре и личный.
- C. Рассмотрены 3 компонента формирования межкультурной языковой коммуникации как конечной цели обучения русскому языку по данному пособию:
 - I. Коммуникативно-методическая компетенция;
 - II. Лингво-методическая компетенция;
 - III. Учебно-методическая компетенция.

(シヴァコーヴァ・ステラ, 創価大学)

【B19】近代ロシア文章語形成期の諸作家における造語体系について ラヂシチェフ、カラムジン、プーシキンの場合

浦井 康男

近代ロシア語形成期の語彙的・文体的変化の研究を進めている発表者は、上記三者の代表的な作品に対してコンコーダンスと語彙統計を作成したが、これらのデータをパソコン上で重ね合わせて、語彙比較を行っている。これによって、従来の印象批評に基づいていた各作家の語彙の特徴が、具体的に示せると思われる。

三者の名詞・形容詞・動詞の出現の割合を、統計的に評価すると次のようになった。カラムジンでは、形容詞が極端に、また名詞もかなり多いが、その反対に動詞は極端に少ない。プーシキンでは、動詞が極端に多く、その反対に形容詞と名詞が、相当に少ない。ラヂシチェフでは名詞が多く、形容詞が少ないが、その差は他の二人ほど極端ではない。

語彙的意義を持つ語は、テーマによってその出現が大きく変わるため、個別語の頻度の比較では意味をなさないことが多い。これを回避し三者の語彙体系を形式的に評価する方法として、本研究では接辞による語の派生関係に焦点を当てた。本発表では時間的制約もあり、*тель* の行為者名詞に重点をおいたが、元の論文では三者の造語法の違いを、名詞、形容詞、動詞について詳細に分析している。

動詞を派生元とする行為者名詞の体系的な派生は、ラヂシチェフに特徴的なものであり、多くの名詞が派生されているが、現代ロシア語に引き継がれなかったものも多い。新語には、新しい対象や概念を表現するために作られ、一般的に使用されるようになった新語(neologism)と並んで、特定の文脈で一度だけ作られ、一般的な使用を目的としない「機会語」も数多くある。ラヂシチェフで上記のもの多くは、この機会語に属すると考えられる。

それではなぜラヂシチェフで、機会語の造語が多いのであろうか。「言語の近代化」と呼ばれる過程では一見、造語体系が整備され、体系的な派生が行われるようになると考えられるが、実際には逆で、共通スラヴ語期にまで遡る *тель* による造語は、日本人には「漢語」に近い性格のものであろう。この接辞の意義は明確で誤解されることはないが、逆に造語が機械的なため、ロシア語起源の多彩な接尾辞に比べて、語の印象が低いと思われる。さらにラヂシチェフではこの語に様々な不一致定語が付き、表現や統辞の圧縮がなされていることも分かった。

(うらい やすお, 北海道大学)

【B20】ラジーシチェフの『人間論』再考

今仁 直人

ラジーシチェフが1792年初めより執筆した『人間論』、その死と不死については、唯物論的生死観を展開した著作ではない。これは流刑地に辿り着いた著者が友らとの現世での別れを覚悟し、来世における再会を願いつつ書いた作品であって、むしろ靈魂の不死の思想がその主調をなしているのである。諸研究が明らかにしているように、ここにはプラトンやライプニッツの影響、カントとの同時代性なども認められるが、とりわけヘルダーの援用が顕著である。第三部末尾で身体的なものと感覚的なものを捨象し、以て自己性を忘却した人間は「思惟の国」へと導かれる。最終第四部では人間の神化と完成への道が示されるが、その途上に祖国愛を含む社会倫理が位置づけられ、その果てに肉体の死後の靈魂の不滅、及び未知なる「組織体」の獲得が結論される。この感覚しえない、目に見えない組織体に「民族精神」が暗示されているとみなすことも出来よう。

『人間論』のこうした思想は死刑宣告や流刑の窮地でもたらした変節ではなく、前後の時期の思想との連関において捉えうるものである。靈魂の不死や道徳的完成といった主張にはフリーメーソンの影響もうかがわれるが、ラジーシチェフのマソンとの接触は70年代にさかのぼることが出来る。道徳の学校たるロッジは市民的美徳の修養の場として公共圏の形成に一定の役割を果たしたが、89年に書かれた『祖国の子とは何かについての対話』では、法を遵守し、祖国に奉仕し、名誉や徳性を重んじる古典的な「市民」が真の人間であり、祖国の子(愛国者)であるとされている。一方で隷属の境遇にあって、こうした人間本来の資質が失われている者は、国家の構成員とはみなされていない。農奴民衆に等しいこれら外部の非構成員は慈善の対象であり、翌年発表される『ペテルブルグからモスクワへの旅』では、「感受性」や「同情」に媒介された情念の共同体に迎え入れられていた。

自由を回復したラジーシチェフはアレクサンドル一世の法典編纂委員会に名を連ねるが、1801年に書いた「法規については、ライプツィヒ留学時代に学んだであろう「ポリス学」の痕跡が認められる。合理的秩序と規律の下に全国民を治めようとするとき、ラジーシチェフが挑んだのは民衆の「市民」化であり、帝国のポリス化あるいは「思惟の国」の実現である。『人間論』は、この法の共同体と情念の共同体をつなぐ思考であったといえる。

(いまに なおと, 札幌大学)

【B21】Л.トルストイにおける 18 世紀の継承 L.スターンの『センチメンタル・ジャーニ』と Л.トルストイの『幼年時代』

覚張 シルビア

レフ・トルストイは、『幼年時代』の執筆と同時期に、スターンの『センチメンタル・ジャーニ』を英語からロシア語に翻訳している。『センチメンタル・ジャーニ』は、トルストイが 14 歳から 20 歳の間に大きな印象を受けた作品リストに加えられており、印象の度合いも「とても大きい」と記されていた。1909 年 12 月 25 日付けの日記によれば、トルストイは『センチメンタル・ジャーニ』を読み返して「特別で、新しく、複雑な何物か」を表現したい欲求に駆られているが、その何物かは「芸術的で形象的」なものであるという。こうしたことから、スターンの著作が、トルストイに文学的な創作欲を与えていることが分かる。

さらに、『幼年時代』の執筆と同時期に行われた翻訳作業は、自己の作品を批判的に見る視点を与えている。トルストイは、主題からの逸脱を着想の豊かさによるのではなく悪い癖であるとし、彼の愛するスターンにおいてすら、この逸脱が耐え難いものであることを指摘している。主題から逸脱し易いこれら二人の作家に共通しているのは、ディテールの描写であろう。両者の作品は、主題とは一見関わりのないディテールが多く描かれているか、或いは作品そのものがディテールによって構成されており、主題が存在しないという印象を与えることすらある。しかしながら、作品がディテールによって構成されることは全くの無秩序を意味するのではなく、ここに一定のメカニズムが生じ得る。

Г.А.レスキスは、スターンが人間のあらゆる見解の主観性を露わにすることで事実の相対性を明確にしたことに対して、トルストイにおいては逆のメカニズムが働くとしている。А.Ф.ヴィノグラдовは、『幼年時代』においては、主人公の心の動きが、外部の人間関係や出来事との相関関係によって、主観的な次元から客観的な次元へと高められていることを論証している。

『幼年時代』の初稿と最終稿を比較すると、スターンのユーモアの特徴である「コミカル」と「パセチック」の混在の程度が次第に緩和されていくことが分かる。また、スターンにおいては、「共感」が偏狭なものであるのに対し、トルストイにおいては、「共感」が真・善・美という外在的基準にも支えられており、「博愛」に通じる可能性を持つ。トルストイは、その創作技法においてスターンの影響下にありながらも、初期作品において、すでに独自の世界を創出していたのだといえる。(かくばり しるびあ、東京大学大学院生)

【B22】ロシア語における身体の所有者マーカ―としての「y+生格」 与格との比較

水野 晶子

本発表では、Она подошла и поцеловала у него руку, он поцеловал у нее. (И.А.Бунин 1938 «Темные аллеи») に見られるような客体である身体の所有者マーカ―としての「y+生格」表現について取り上げる。

ロシア語における「y+生格」による所有者表示は、通時的には「与格」による所有者表示が制限される過程でそのシノニムとして使用域を広げてきたものだとされている。そしてこの与格による所有者表示の「y+生格」へのシフト現象は、主格や前置格に置かれた名詞句のみにとどまらず、対格の名詞句にも拡大傾向にあることが指摘されている。その一方で、共時的な視点からは、所有者マーカ―としての「与格」と「y+生格」は、「譲渡可能性」「動作の様態とタイプ」「話し手の共感」等をその両マーカ―の選択要因とすることが指摘されており、両者の関係は共時的にはシノニムであるというには問題のあるレベルのものである。この様な従来から指摘されてきた通時的な視点から言及される両者のシノニム性と共時的な分析から指摘される両者の意味的、語用論的な差異、それぞれの主張はそれぞれに理にかなったものであるが、そこには通時と共時の断絶とも言える空白がある。本発表では、この空白を埋めるべく、19-20 世紀の文学テキスト約 1400 万語(328 作品)を言語資料として「AガPノ身体ニVスル」表現における身体の所有者マーカ―としての「y+生格」の使用を観察することを通して、所有者マーカ―、殊に身体の所有者マーカ―としての「与格」と「y+生格」が現在のような形でそれぞれの使用域を差別化してきた道筋を一つの仮説として提出することを試みる。

具体的には、19-20 世紀の文学テキストにおいて「与格」と「y+生格」の並行使用が観察される動詞 целовать-поцеловать, пожимать-пожать, щупать-пощупать, чесать-почесать, щекотать-пощекотать, осматривать-осмотреть, вырывать-вырвать, отнимать-отнять 等の用例分析を通して以下の四点 1)通時的な視点から言及される「y+生格」と与格のシノニム性、2)「y+生格」の使用における個人差、3)所有者のタイプと「y+生格」と与格の選択の相関関係、4)19 世紀から 20 世紀にかけての「y+生格」の使用の減少傾向と、従来の指摘とは異なる「y+生格」から「与格」という流れを指摘し、これを踏まえた上で仮説を導く。

(みずの あきこ、名古屋大学大学院生)

【B23】現代ロシア語における 格融合 と 格階層の相関性

野口 卓眞

現代ロシア語における一般的な格の種類は全部で六つであるが、一つの語において六つの格全てが形態的に区別されることはなく、常に同形になる格形式が生じる。例えば、男・中性名詞単数では、生物・無生物の区別によって、主格と生格、主格と対格がそれぞれ形態的に同形となる。一方、女性名詞単数では、あらゆる場合で与格と前置格が同形となっており、形態的区別を失っている。このように現代ロシア語では、いかなる状況下でも六つの形態格を固有の形式によって区別することはない。この現象は「格融合 падежный синкретизм」と呼ばれる。

このような格融合は、様々な条件によって発生するが、そのパターンは規則的かつ限定的である。また、格融合が生物・無生物の区別のような語彙意味的な要因によって異なったパターンになることを考慮すると、格融合は、中和 нейтрализация と呼ばれる偶発的な音韻的变化の結果として生じた可能性の他に、より根本的な規則に従って起こっている可能性があることは十分に考えられる。

本発表はこの点に注目し、「格階層 падежная иерархия」と呼ばれる概念を取り上げ、格階層が格融合を発生させる要因であると仮定する。格階層とは、それぞれの格が一定の順序に並んでいる一種の含意法則として記述したもので、有標性階層とも呼ばれる。階層内では、下位に位置する格が上位に位置する格に比べて、より有標となり、逆に、上位の格は下位の格に比べて、より無標となる。すなわち、格がある特徴を持っている場合、有標とされる格はその特徴を常に表わし、無標の格はその特徴を表わすときもあれば、表わさないときもある。例えば、男性名詞単数において、主格と対格が比較される場合、対格は常に他の格と融合するが、主格は必ずしもそうではない。従ってこの場合、格融合という特徴に関して、対格は有標であるが、主格は無標になるわけである。

本発表は、格階層という格理論を構築する一環として、同一の格標識が複数の格を標示する現象である格融合を、格階層によって説明付けることを目的とする。格階層によって格融合を分析する利点は、それぞれの事例を個別に捉えるのではなく、格融合を全体的に捉え、格融合が発生する基本的原理を究明することにある。

(のぐち たくま, 神戸市外国語大学大学院生)

【B24】動詞 В 活動体名詞 の結合に現れる活動体名詞の複数主格形と同形の主格対格形について

南條 幸弘

本発表における対象は広義の現代標準ロシア語である。現代ロシア語の名詞の対格形は、通常、単数形(語尾が- , - で終わる男性名詞は除く)と複数形(男性名詞, 女性名詞, 中性名詞)では、名詞が活動体名詞であるか不活動体名詞であるかによって異なる。本発表の対象は、<動詞>前置詞 <活動体名詞>という結合において現れる活動体名詞複数主格形と同形の対格形、および活動体名詞複数生格形と同形の生格対格形とする。活動体名詞複数主格形と同形の対格形を主格対格形と呼び、活動体名詞複数生格形と同形の対格形を生格対格形と呼ぶこととする。本発表の目的は次の3点である。すなわち、複数主格対格形の活動体名詞は対象が集散的に捉えられるが、複数生格対格形の活動体名詞は個別的に捉えられるとする先行研究をチュービンゲン大学ロシア語コースおよびロシア語ナショナルコースの検索結果から得た実際の用例によって検討すること、活動体名詞複数主格対格形と活動体名詞複数生格対格形の使用に表される意味上の違いを活動体名詞にかかる形容詞の一致定語の側面から検討すること、そして主格対格形と関係形容詞と生格対格形と性質形容詞との相関関係の要因を探ることである。

本発表の結論は、以下の3点にまとめることができる。1. 複数主格対格形の活動体名詞は対象が集散的に捉えられ、複数生格対格形の活動体名詞は個別的に捉えられるとする先行研究を支持する結論を得た。2. 複数主格対格形のみを要求する動詞についての活動体名詞の一致定語には関係形容詞が多いという結論を得た。しかしながら、複数主格対格形と複数生格対格形をとる動詞の活動体名詞の一致定語については、特に際立った傾向は認められなかった。3. 関係形容詞と主格対格形の表す一般性、性質形容詞と生格対格形の表す個別性それぞれの相関関係については、外延が広く、内包の少ない関係形容詞の一致定語は集散的、一般的意義を表すこと、そして外延が狭く、内包が多い性質形容詞の一致定語は具体的、個別的意義を表すことと関係がある。

(なんじょう ゆきひろ, 東京外国語大学大学院生)

【B25】国境の認識 「北方領土問題」の始まり

有泉 和子

我が国政府は北方四島の領有正当性の根拠を江戸時代にまで遡り、その主な主張は、1)1644(正保元)年、幕府作成の絵図に「くなしり、えとほろ、うるふ」等の名が記載され、2)1785(天明5)年及び1791(寛政3)年、最上徳内等の蝦夷地派遣、3)1798(寛政10)年、近藤重蔵・最上徳内等が国後・択捉に渡海、択捉に「大日本恵登呂府」の標柱を建て、1799-1800年、重蔵・嘉兵衛等の国後・択捉再渡海、択捉に漁場を開き、幕吏を置き、1800年、嘉兵衛のエトロフ航路開設、4)1855(安政元)年、伊豆下田における日魯通好条約締結で両国国境が択捉と得撫の間に引かれ、さらに展開は1875(明治8)年、樺太千島交換条約で樺太を放棄する代償としてロシアから千島列島を譲られ、以降に続くとしている。

だが、1855年の安政下田条約以前の幕府にそこまで明確な国境画定意識があったのかどうか、また、一方、ロシア人の認識はどの程度のものであったのか。

報告者は、主にゴロヴニン事件解決時(文化10(1813)年)より以前の、各時期の幕府の支配体制と北方地域認識の現状、老中等幕閣の国境認識、ロシアを含むヨーロッパ作成の地図のそれまでのありさま、および、当時のロシア海軍軍人の認識を例に取り、政治的発言を慎重に避けつつ、両国の北方認識、国境認識の始まりに言及したい。使用する主な史料は以下の通り。

日本側は、東京大学史料編纂所蔵・松平定信『魯西亜人取扱手留』(寛政4年)、同「近藤重蔵蝦夷地関係史料」(寛政9-10年)、国立公文書館内閣文庫所蔵・大槻玄澤『北邊探事補遺附或問』(文化4年)、北海道北見市市立北見図書館所蔵『蝦夷地一件意見書草案』(文化4年)、東京大学史料編纂所蔵『大河内文書林述斎書簡』(文化4年)、国立公文書館内閣文庫所蔵『蠹餘一得』(文化5年)、同『函館来槎』(文化10年)、東京大学史料編纂所蔵『函館来槎一件』、ゴロヴニン事件解決時の幕閣の指図書及び松前奉行支配下役人等の申上書(文化10年)、国立歴史民俗博物館所蔵・平田篤胤『千島の白浪』(文化10年)等。

ロシア側が、ロシア国立海軍文書館所蔵1768年、及び1779年海軍省編纂地図、1804-05年クルーゼンシュテルンの航海日誌、付属アトラス(1813年刊)、及び別表、1807年ダヴィドフの航海日誌、1810年海軍大臣宛海軍省の上申書、1810年ゴロヴィン宛海軍省指令書、さらに、1811-13年ゴロヴニンの手記、ゴロヴニンの英国留学仲間ゴロヴニン事件解決時オホーツク港湾隊長・海軍中佐ミニツキーの1813年の書簡等。

(ありいずみ かずこ、東京大学史料編纂所)

【B26】帝政末期におけるポグロムとロシア知識人の反応

赤尾 光春

帝政末期に断続的に起きたポグロム(ユダヤ人虐殺)をめぐって、ロシアの知識人階層の間で抗議活動が精力的に展開されたことはあまり知られていない。本報告では、ロシア知識人の中で展開されたユダヤ人擁護運動において、ことに重要な役割を果たしたレフ・トルストイ(1828-1910)、ウラジーミル・ソロヴィヨフ(1853-1900)、ウラジーミル・コロレンコ(1853-1921)、マクシム・ゴーリキー(1868-1936)の4人の言論活動に焦点を当て、「ユダヤ人問題」に対するこの4者4様のアプローチの比較を通して、その今日的意義について考察する。

トルストイは、書簡や声明において、ポグロムの横行を許した帝政ロシアに対する非難を幾度も表明しているが、「ユダヤ人問題」をあくまで権力と宗教的寛容に関する一般的命題の一つとして扱っており、自らの思想的営為の根幹に位置づけることはなかった。これに対して、生涯にわたってユダヤ人擁護運動を一貫して展開した宗教思想家ソロヴィヨフは、「ユダヤ人問題」をむしろ「キリスト教問題」として捉え、その解決を正教徒たるスラブ民族の自己完成化に向けた最重要課題と位置づけた点で、トルストイとは対照的であり、ユダヤ人社会における評価も高い。

一方、無神論の立場から反ユダヤ主義への断固たる反対の姿勢を貫いたゴーリキーとコロレンコもまた、「ユダヤ人問題」へのアプローチは対照的である。ユダヤ教のモラルを高く評価し、ユダヤ文化の愛好家でもあったゴーリキーは、「ユダヤ人問題」の解決を、なによりもロシア人の傷ついた自尊心の回復の契機として位置づけた。これに対して、コロレンコは、当時の知識人の一部に見られた「ユダヤ人」に対する感傷的態度を批判しつつ、「ユダヤ人問題」は、あらゆる社会的問題と同様、あくまで「公正さ」を基準として取り組むべき問題であり、状況如何によって変わりうる一時的な愛憎に影響されてはならないとした。

「ユダヤ人問題」を「キリスト教問題/ロシア人問題」として徹底的に内面化することによって、積極的なユダヤ人擁護運動を展開したソロヴィヨフやゴーリキーの態度とともに、「ユダヤ人問題」という当時のロシアにおける「国民的問題」について、感情論と正義論と切り離れたコロレンコの冷徹な現実主義とは、今日の社会問題を考える上でもその有効性を失っていない。

(あかお みつはる、北海道大学スラブ研究センター)

【B27】歴史改変小説と帝国のイメージ

越野 剛

ソ連崩壊後の 1990 年代のロシアでは「オルタナティブ・ヒストリー альтернативная история」あるいは歴史改変小説と呼ばれる SF ジャンルが多く書かれるようになった。これは歴史上のどこかの時点に「あのときこうなっていたら」という分岐点を設けて、架空の歴史を描くものである。今回の発表ではパーヴェル・クルサノフ(Павел Крусанов)の『天使に噛まれて Укус ангела』(2000)とヴァチエスラフ・ルイバコフ(Вячеслав Рыбаков)の『没有壞人 ユーラシア交響曲 Плохих людей нет: Евразийская симфония』(2000-)シリーズを中心に取り上げる。どちらの作品もロシアと中国を融合したようなユーラシヤ的な帝国の架空の歴史を描いている。歴史改変小説ジャンルに属するほかの作品についても時間の許す限りで触れる。ナチス化したロシアを描いたアンドレイ・ラザルチュークの『異なる空』(1993)、歴史改変小説ジャンルにパロディ的に論争を挑んだように見えるキール・ブレイチョフの『クロノスの河』(2000)などである。

同時に歴史学におけるパラレルな動向にも着目する。ペレストロイカ期に盛んになった「歴史の見直し」や「オルタナティブ論」、レフ・グミリョフのユーラシヤ主義的歴史観、ノソフスキーとフォメンコの「新しい年代学 новая хронология」のような偽史的傾向も考察の対象となる。

現代ロシアの文学や映画の研究では「帝国回帰」や「帝国への郷愁」ともいうべき傾向がしばしば話題となる。歴史改変小説の流行には「ロシア史がこうなっていたらよかったのに」というオルタナティブな願望が作用しており、それがソ連崩壊後の危機の時代に帝国への志向と結びついたと考えられる。帝国を欲望する読者と帝国モチーフを用いてオルタナティブな文学的遊戯を行う作家との関係を見る中で、両者の志向のズレや共犯関係にまで考察が至れば幸いである。

(こしの ごとく, 北海道大学)

【C28】アレクサンドル・ドゥ(杜立福)長司祭の生涯

塚田 力

17 世紀後半以降、アルバジンツィ(阿爾巴津人, Арбажинцы)と呼ばれるロシア系住民の集団が北京に居住していた。彼らは清朝との戦闘の中で捕虜となり、後に清朝に帰順し、その後長く清朝の軍人として仕えた者たちの子孫である。現在の駐北京ロシア大使館の周囲に集住していた。ロシア正教の教会も文化大革命までは存在した。北京市内の当該地域に、現在も 300 人前後の彼らの末裔が居住しているとされる。

アレクサンドル・ドゥ(杜立福, Александр Ду)長司祭は、1923 年 1 月 17 日、北京の正教徒共同体でロシア系 18 世の中国人として生まれた。彼は 1950 年には北京および中国の大主教ピクトルから司祭に叙聖され、後には長司祭を任じられた。北京教区においてさまざまな役職を歴任した。

1960 年代には政治的な理由から投獄され、その後も長らく宗教活動に制限を受けた。のち、1993 年 12 月には『北京におけるロシア正教の興衰(俄国東正教在北京の興衰)』の一文を羅榮禄と共著した。終生信仰を保ち、2000 年にハルビンの朱世僕司祭が亡くなった後は中国で最後の正教会聖職者となった。複数のメディアの取材を受けるなどし、2001 年にはロシア正教会総主教から表彰を受けた。

彼は 2003 年 12 月 16 日に逝去した。同 18 日に北京市の天主教南堂においてディオニーシー・ボズドニャーエフ(Дионисий Поздняев)司祭により行われた葬儀には、多数の参列者が訪れた。会場提供を含め、葬儀には中国天主教会北京教区が協力し、中国天主教団北京教区主教、中国天主教愛国会主席、全国人民代表大会常務委員会副主席、北京市政治協商会議副主席の溥鈺山氏からは花輪が贈られた。彼の亡骸は北京市西郊の八宝山公墓に埋葬された。

本報告では、アレクサンドル・ドゥ長司祭の生涯を辿りつつ、20 世紀の北京における宗教政策とロシア正教会をめぐる状況の一端を明らかにし、その特異な環境における正教会聖職者の宗教観について考察したい。

(つかだ つとむ, 北海道大学大学院生)

【C29】中世ロシアにおける慣習と裁判—「ルースカヤ・ブラウダ」を中心に

草加 千鶴

10 世紀のキリスト教導入にも見られるように、公はルーシにおける支配の確立に力を注いだ。「ルースカヤ・ブラウダ」編纂に代表される法整備もまた公の権力を確立するための手段の一つであった。しかし「ルースカヤ・ブラウダ」の最初の編纂が行われた 11 世紀前半には「古いものは正しい」とする慣習が民衆を支配しており、それを劇的に変えるほどの力は公にはまだなかった。

それゆえに公は長い時間をかけて、民衆に対する国家的支配力を徐々に浸透させていく必要があった。11 世紀前半から 12 世紀前半にかけて起きた「ルースカヤ・ブラウダ」の規定の変化は、キエフ・ルーシにおける公の権力の伸長を反映している。

その顕著な例が殺人および傷害に関する規定に見られる。「ルースカヤ・ブラウダ」中でも成立年代が最も古い、簡素本「ヤロスラフのブラウダ」では、殺人に対しては被害者の近親者が、傷害に対しては被害者自身あるいは近親者が復讐を行い、それが何らかの事情により不可能な場合にのみ賠償金の支払いが命じられる。それに対して、時代的には後になって編纂された「ルースカヤ・ブラウダ」拡大本においては、復讐は全面的に廃止され、賠償金の支払いのみとされ、特別な理由なくして殺人にいたる場合においては追放および財産の没収という重刑が科せられることになった。

復讐は人間の自然な感情に発するものであるため、報復方法としては非常に原始的な種類のものである。この復讐という慣習は、一定の権力が存在する状況下においては制限される。私人の手による制裁が禁止され、その代わりとして権力によって社会的制裁が実行される。しかし当時は公の支配力はいまだ絶対的ではなかったため、慣習を逸脱しない形での手段が求められた。

例えば裁判規定においてその痕跡が見られる。有罪の証拠となりうるのは物的証拠、目撃者による証言、容疑者の人格に関する証言、神判である。特に人格に関する証言および神判は、前者の客観的な証拠に対して一般民衆の感情に配慮したものと見える。

本発表では、様々な「ルースカヤ・ブラウダ」のうち、成立年代が最も古い簡素本と、それに続く拡大本を取り上げ、それらの条文に見られる規定の変化を通じて、公がいかにして民衆への支配を確立していったか、また民衆はそれをどのように受け入れていったかを明らかにする。(くさか ちづる, 創価大学大学院生)

【C30】フィリーチカにおける現実性(リアリティ)の表現 死人のフィリーチカを中心に

山田 徹也

フィリーチカはロシアにおける散文フォークロアの 1 ジャンルであり、そこにはレーシイ、ヴォジャノイ、ルサルカ等の森や水の中に棲むとされる妖怪や悪魔、または死人、魔術師、魔女といった様々な超自然的存在が登場する。またフィリーチカとは、以上のような超自然的存在と語り手本人やその親類、知人などとの遭遇、あるいは宝物、魔法、変身、幻等の不可思議な出来事に関する話であり、かつその内容が現実起きたこととして語られるものであると定義されている。

超自然的存在の中でも死んだはずの人間が生きているかのように動き、話したと語られる「死人」と呼ばれる神話的形象は、民間信仰研究において非常に重要な位置を占めている。それはこの「死人」がルサルカやヴォジャノイ、レーシイなどの妖怪に関する民間信仰の起源の一つとして考えられているためである。

フィリーチカを用いた民間信仰に関する研究が盛んな一方、フィリーチカそのものの研究は、その定義自体が 20 世紀初頭と比較的遅かったということもありほとんどされてこなかった。しかし、言語学者であり、民俗学者でもあるツイヴィヤンがフィリーチカの形式に関する研究として一定の成果をおさめている。彼女は、まずフィリーチカの語りの中にある不可思議さは非現実的であるがゆえに現実を超えた神話的なものに属するとした。そしてそうした神話的出来事が現実に起きたものとして語られうるのは、その話を現実に起きたものとして聞き手が信じることができるよう語りの手法が用いられているためであるとし、その例としていくつかの言語学的特徴を挙げている。

しかし、語りの手法の他に、ある種のフィリーチカにはその語りを現実のものとして認識させるための機能が構造的に備わっており、総体としてそのどちらもが不可思議な出来事を現実に起きたのだとするフィリーチカを成立させている。本発表では、「死人」の登場するフィリーチカを例としてツイヴィヤンの考えをふまえつつ、フィリーチカにおける現実性(リアリティ)の表現について論じてゆきたい。

(やまだ てつや, 早稲田大学大学院生)

【C31】1930-40 年代ロシア農村の娯楽とバラライカ
 コストロマ州ネレフタ地区の調査をもとに

柚木 かおり

本発表は、2001-03 年のコストロマ州ネレフタ地区でのフィールドワークで得られたデータ(証言、演奏など)をもとに、1930-40 年代のヨーロッパ・ロシア中部の一農村における娯楽、特に音楽が関連する娯楽の行われ方を、ロシアの代表的な楽器として知られているバラライカを中心に再現し、叙述するものである。20-30 年代生まれのインフォーマントたちは子供・青春時代の記憶を年代とともに鮮明に覚えており、彼らとの対話によって、私たちはこれまで文書には記されてこなかった文化の歴史を知ることができる。当該地区はソ連の文化政策が適応されたがその影響をさほど強くは受けておらず、ソ連以前の状況、ソ連時代にとられた政策、その結果について大変可視的な様相を呈しているという意味で、当該の時代のロシア農村のみならず、ソ連の文化政策の実例を提供することができるだろう。

(ゆのき かおり、関西外国語大学)

【C32】記録する眼 グラフ雑誌『建設のソ連邦』における「白海 バルト海運河」のイメージ

江村 公

グラフ雑誌『建設のソ連邦』は、1930 年から 1941 年半ばまで月刊で発行された、五カ年計画の成果を宣伝するためのプロパガンダ雑誌である。その 1933 年 12 号「白海 バルト海運河建設」特集号をロトチェンコが担当した。リシツキイもまた、この雑誌の編集に関わっていたことが有名だが、通例、この雑誌においては匿名の写真家が撮影した写真を別のデザイナーが編集するという手法が取られていた。しかし、「白海 バルト海運河建設」特集号において、ロトチェンコは現地に赴いて撮影を行い、自ら編集を行っている。本発表では、「事実」の記録という観点から、この「運河」の表象におけるロトチェンコの写真を手がかりに、「事実」を記録し、収集し、編集することの意味をあきらかにする。

ロトチェンコにとって「白海 バルト海運河建設」の仕事は、彼の写真における実験の晩年の仕事であり、その総決算でもあった。また、このプロジェクトはロシア・アヴァンギャルドから全体主義文化への移行においても重要な出来事であったといえる。本発表では、まず、「事実の文学」をめぐる議論を念頭に置きつつ、ロトチェンコが過去に培ってきた写真における手法(ラクルスやモンタージュ)と「運河」の表象における手法とのあいだに連続性があったという立場から、彼の「運河」の表象を再検討する。その際に、ファクトゥーラの手法にも注目したい。ファクトゥーラは一般的には絵画の表面やきめを指すが、そうした効果を生みだすための素材の選択やプロセスをも含むものとも考えられる。1920 年代初頭に、絵筆を捨て、カメラを選択したロトチェンコの写真において、どのようなファクトゥーラの表現が可能であったのか。さらに、ロトチェンコと同様に視覚的な媒体における「事実」の記録を目指したヴェルトフの映像も参照し、ロトチェンコとの技法上の共通点を見出したい。また、ヴェルトフの作品においても、運河やダムなどが表象されているように、1930 年代初頭のソ連という国家にとって「運河」とは、社会的・政治的・美的なさまざまな潮流がひとつに収斂する場であったといえる。対象として選ばれた「運河」が象徴するものについても言及したい。

(えむら きみ、大阪大谷大学)

【C33】バレエ・リュス初期作品《火の鳥》研究 民話から生まれた「火の鳥」の妖艶な女性像

平野 恵美子

バレエ・リュスの《火の鳥》について、ロシア民話の『火の鳥』に着目し、民話がバレエ化される過程で、「火の鳥」の役割がどのように変化し、また定義されたのかについて議論する。

《火の鳥》は、当時の西欧の熱狂的なロシア・ブームと同時に、ロシア国内の芸術におけるネオ・ナショナリスティックな動向を背景に、初めて本格的にロシア民話をバレエ化しようとする試みによって生まれた。だが複数の民話をつなぎ合わせたため、民話では別々の話に登場するコシチェイと火の鳥がバレエでは同時に登場するなど、民話とバレエの間で幾つかの相違が生じてしまった。また民話では動物(鳥)であり性別不明の「火の鳥」が、バレエでは妖艶な女性像として描かれた。その結果、バレエ中にヒロインが二人いるという状況が生まれた。

民話の「火の鳥」は「捕らえられる」対象であり、たとえ「火の鳥」の性別が明示されていなくても多くの昔話でそうであるように、この事は「火の鳥」が女性であることを示唆している。また民話の「火の鳥」は災いももたらすもの、すなわち「力強く」「恐ろしい」存在でもある。さらに「火の鳥」は非人間世界に属しており、イワン王子にとって手の届かない存在、すなわち憧れでもある。これは清楚で何の力も持たない親しみやすいエレナ王女とは対照的である。イワン王子は同じ人間でロシア人であるエレナ王女に惹かれるが、火の鳥にも魅了されている。

これまでの先行研究において論議されてきたバレエ作品における「火の鳥」の役割論は、すなわち、ロシア革命と結びつけたガラフォラ、主人公を助ける存在としたタルーシキン、他者アジアの象徴・母なるロシアの化身とみるベーンズらである。だがこれらの見方とは異なり、本研究の結果としては、妖艶な女性像「火の鳥」に役割を変化させたということを強調したい。そしてバレエ《火の鳥》では、「火の鳥」をエレナ王女とは対照的な妖艶で力強い女性として描くことによって、火の鳥、王女、王子の三人の伝統的な三角関係をバレエの中に形成した。男女の三角関係というのは物語に一つの安定性を与える。《火の鳥》は伝統的な三角関係を置くことによって、ロシア民話というおとぎ話の中にも現実味をもたせ、民族・地域を越えて観客に受け入れられる身近な人間ドラマとなった。

(ひらの えみこ, 東京大学大学院生)

【C34】レーミゾフの文学テキストと「舞踊」

小椋 彩

レーミゾフにおいて「舞踊」はその文学テキストとどのように関連付けられるだろうか。

『踊るデーモン』(1949)は、独立した10篇の文章のそれぞれが、「踊る人」あるいは「踊り」のイメージを含む。レーミゾフは「踊るデーモン」としてダンサーのセルジュ・リファールを絶賛し、その踊りを「吹雪」や「疾風」にたとえるが、この比喻には、外見的特徴以上の意味がある。レーミゾフはリファールに「ロシア的原初性」を見出し、観客に一種の宗教的陶酔を呼び起こす様子を「デーモン」と表現した。しかし、こうした荒々しいリファール像とは作家の創作であり、重要なのは、むしろ舞踊家であるリファールがテキストに導入する「舞踊」のモチーフそのものである。

「踊り」に「原初的なロシア」の意味が与えられたのは、1900年代のフォークロアの改作がその始めである。『リモナーリ』には、大地に災厄をもたらす「スチヒーヤ」としての「踊り」が描かれる。「踊り」に端を発した「疾風」のモチーフは邪悪の象徴となってこの後の作品にも展開され、『疾風のルーシ』(1927)で、「革命」と「スチヒーヤ」は、ともに抗いがたい力で人間を翻弄する。「踊り」が邪悪さの起源である一方、単語「輪舞 хоровод」を、レーミゾフは好んで用いた。作家の出自はしばしば「輪舞」とともに語られ、ロシア的なものの全体を表象する。「踊り」が「原初的なロシア」であることは「記憶」との繋がりも示唆するが、この関係性は象徴的意味の問題にとどまらない。『剪りとられた眼で』や初期の小説『十字架の姉妹』は、同一フレーズの反復によって個々の独立した断片の統一が保たれる。これをレーミゾフは「回帰モチーフ」と言った。読者の直線的な読みを阻むこの手法は、レーミゾフの象徴派的な時間感覚を開示すると同時に、「歴史的事象」の流れからの逸脱を志向するという意味で、文学手法でありながらも、「実際の舞踊」を思わせる。作家としての自分を「羽ペン」というメタファーで語り、紙面にカリグラフィーの文字を綴ったレーミゾフは、「踊り」と「書くこと」を同列に並べる。もし「見えるもの」と「見えないもの」とに境があるとすれば、その臨界面とは紙(テキスト)であり、「踊る」こととは、動きによって「見えないもの」を表面化させること、「踊る者」「書く者」の身体はペンである。「踊り」を手掛かりにすることで、時間芸術と空間芸術を統合しようとするレーミゾフの試みに、新しい読みが提示されるのである。

(おぐら ひかる, 工学院大学)

【C35】現代ロシア女性文学と「フェミニズム」

前田 しほ

近年、英語圏で盛んなフェミニズム批評はロシア文学研究にも波及している。またロシア本国での 20 世紀後半の女性文学の展開と重なり、90 年代欧米ではフェミニズムの視座と現代ロシアの女性文学を結び付けた研究が盛んに行われている。

しかし、当のロシアでは「フェミニズム」は一般に嫌悪の感情を呼び起こす。女性の世界や問題を書くことを主要な主題とみなす女性作家でさえ、自分の作品にフェミニズム的な目的はない、そもそもフェミニズムは女性らしさを無用に損なうものだ、ロシアにはフェミニズムは必要ないと主張する。英語圏のフェミニストはこうした矛盾を怪訝に思いながらも、結局フェミニズム意識の低さが露呈したとみなす傾向にある。

本発表はこの断絶に注目し、西側のフェミニズムがロシア女性の言説や作品を見る視点を検証する。例えば、ロシア女性によるフェミニズム批判は「アンチフェミニズム」と呼ばれるが、このレッテル張りは、西側フェミニズムに都合のよいコンテクストへと回収している。つまり自分たちのフェミニズムが主張する人権や普遍性に対する批判を封じ込め、議論の余地を排除していると考えられる。ここには、西洋フェミニズムの尺度が素朴に援用され、尺度そのものの妥当性を検証することに注意を向けない様子が窺われる。しかも、こうした操作によって、ロシア女性たちは全体主義体制に抑圧された犠牲者とみなされ、真の人権を教え諭し、正しい道に導いてやらねばならない格下げされた他者として位置づけられる(西洋フェミニズムの普遍性への過信は、近年ポストコロニアル・フェミニズムの立場から鋭く指摘されている)。

そこで、ロシア女性の「アンチフェミニズム」的言説を、(ポスト)フェミニズムのパースペクティブにおいて理解しうるものとして見直す。特に女性文学をめぐる言説に注目し、フェミニズムについての否定的な発言と、肯定的な言説を詳細に見ることで、ロシアでは「フェミニズム」のタームがどのような概念を含んでいるのか考える。

(まえだ しほ, 室蘭工業大学)

【C36】1960 年代の女性の散文

高柳 聡子

ポストスターリン期の 1960 代に、多くの女性たちが回想録や回想的フィクションを執筆している。本発表では、その中から H. グレコヴァ(1907-2002)とナターリヤ・バランスカヤの作品を見ていきながら、今では忘れられてしまった感のある彼女たちの創作が、この時期の特徴的なジャンルを確立していること、さらには、その後の女性作家たちの創作へと続く文学史的な役割も果たしていたことを確認していく。

スターリンの死後、女性たちの手による回想録が多く手がけられる。その中には、イリーナ・ラトゥシンスカヤやリジヤ・ギンズブルグが執筆したようなラゲリの記録もあり、それらは、隠されたソヴィエトの内部を知る上で非常に興味深いものとなっている。これと同時に、ソヴィエトの女性の日常を記録的に記した作品も発表される。1960 年から執筆を開始したグレコヴァは、処女作『初めての空襲 *Первый налет*』以後、インテリ女性がソヴィエト的な生活の中でアイデンティティの喪失感に苦悩する様子を淡々と描いていく。

ナターリヤ・バランスカヤは、あらゆる階級の女性に焦点をあて、同じようにソヴィエトの生活に追われて人生に疑問を抱きながら何の手立ても見出せない主人公を描いている。文学的にはさほど高い評価は受けなかった彼女たちの作品は、今の視点から見ると、ある特徴を作り出している。スターリン時代を記録する過去の回想・記録的フィクションであるということ、それは、生活の中の女性というミクロの視点からスターリン時代の日常を記録することになっている。

グレコヴァもバランスカヤも、(ここ数年多く出版されている)ロシア現代文学史などにはほとんど名前が出てこない。しかし、彼女たちの創作は、80 年代以降に現れた新しいタイプの女性作家たちのさきがけとなっている。ポストモダニズムの女性作家たちの創作もまた、回想的フィクションの新たな形式となっているからだ。

(たかやなぎ さとこ, 早稲田大学大学院生)

【C37】シギズムンド・クルジジャンフスキイ『菜
Книжная закладка』研究

上田 洋子

1927年の短編『菜』は、「テーマ」をテーマとしている。アルパート通りに暮らす作家本人とおぼしき主人公は、古い書類の間に絹の菜を見つけたことをきっかけに、近年菜を挟んでじっくり読むべき本に出会わないことに思いを巡らせる。熟考しようとして外に出た主人公は、トヴェルスキイ並木通りのベンチで、偶然同席した人々を相手にひたすら物語を語る人物に遭遇する。この「テーマハンター *ловец тем*」と呼ばれる人物は出版できない作家であり、目の前にある些細な事物をテーマに即興の物語を語る才能の持ち主である。テーマハンターは 逃走するエッフェル塔 高所で身動きのとれなくなった猫 失踪した主人公 など、さまざまなテーマを奇想天外に展開するが、同時に自身の文学観を語ることも忘れない。この人物との2度の邂逅を詳細に書き留めることで、主人公は菜を挟むにふさわしい作品を完成させる。

1925年、クルジジャンフスキイは文学論「表題の詩学」や、『文学用語辞典』の表題 映画シナリオ 読者 他の11項目を執筆し、独自の文学観を論文の形にはじめた。続く1926年から29年はクルジジャンフスキイが作家として最も充実していた時期で、全5本の中編のうちの4本がこの間に執筆されている。文学そのものをテーマとした作品が多く書かれたのもこの時期である。『菜』は、1926年の『文字殺しクラブ』、1927-28年の『ミュンヒハウゼンの帰還』という、文学をテーマとする二つの代表的中編の間に執筆されている。これらの中編では物語の空想的な筋において文学のあり方に対する実験が為されるのに対し、『菜』では主人公たちの対話の中でひとつの文学観が明らかにされてゆく。長編小説の時代は19世紀に終わったと考えるクルジジャンフスキイにとって、対話を軸とした形式は、テーマごとに面白いエピソードを簡潔に展開しつつ、独自の文学観を述べるには最適なものであった。

『菜』はトルストイの民話をパロディ化した『人は何で死ぬか』というタイトルのもとにクルジジャンフスキイ自身の手によって編まれた作品集の最後に収められている。今回の発表では、クルジジャンフスキイの文学観を再考しつつ、なぜ「死」をテーマとした作品集『人は何で死ぬか』に、一見死とは無関係な「文学」をテーマとした『菜』が含まれているのかを検証する。

(うえだ ようこ, 早稲田大学大学院生)

【C38】フョードル・ソログープ『創造される伝説』
近藤 扶美子

フョードル・ソログープ(1863-1927)の『創造される伝説 *Творимая легенда*』(1914)における楽園形象について考察する。

『創造される伝説』は三部からなる長篇小説である。作品全体は挿話的であるが、主要人物たちが持つ志向は、作品を結末まで貫いている。その志向とは、現実の地上世界のあり方を疎み、別の、美しい人生が可能であるような世界を求めるといふものである。

作品の主要なテーマは、この志向の実現、つまり、世界を変容させ、地上に楽園世界を創造することにある。この創造される楽園が、連作詩『マイル星 *Звезда Маир*』(1898-1901)に描かれた世界であるとする解釈を、ソログープの創作全体を捉える視点の一つとして提示したい。

連作詩で描かれる別世界は、ソログープが作り出した名前を持つ、マイル星 *Звезда Маир*、オイレーの地 *Земля Ойле*、リゴイ川 *Река Лигой* で構成されている。地上世界から遠く隔たった、その別世界の地上は、光、美、調和、清浄さ、無垢なる愛に満たされている。『創造される伝説』の楽園世界への旅の挿話(第79章)では、これらの名前を伴った、連作詩と同一の楽園が描かれている。

この楽園と類似する別世界は、他の作品においても、夜空の星や少女といった象徴によって描かれている。地上世界に対置されるこれらの別世界は、ソログープの創作全体に及ぶライト・モチーフであり、すべて、同じ一つの楽園形象である。そのことが示されているものとして、三部作を読むことができると考える。

しかし、この楽園についての考察は、形象自体についても、また、『創造される伝説』とのテーマ的な連続についても、十分には行われてこなかった。楽園のモチーフに着目し、その形象そのものの描かれ方と、楽園と登場人物の関係のあり方を探る作業は、ソログープへの新しい接近方法を可能にすると思われる。

(こんどう ふみこ, 東京大学大学院生)

【C39】ソヴィエトによる公的記憶転換の試みとその挫折

高橋 沙奈美

本報告は、ソ連時代のソロフキ諸島におけるさまざまな記憶のあり方を分析しつつ、国家的に記憶されるものとしての「公的記憶」が形成される要因を論考する。

本報告の分析対象であるソロフキ諸島とは、北緯 65 度、東経 36 度、極北の白海沿岸に浮かぶ群島である。この地は、15 世紀からの伝統を持つ修道院・巡礼地という宗教的な「聖地」としての側面を持つ一方、17 世紀の旧教徒反乱やソ連期の強制収容所に代表される「悲劇の地」としての顔を持つ。帝政末期にも現代にも、この地はロシア史の重要なモメントを経験した「記憶の場」として、国家的な記念・顕彰行為の対象であり続けた。

その例外が、本報告で焦点を当てるソヴィエト時代である。1920 年、ソロヴェツキー修道院は閉鎖され、「ソロヴェツキー特殊目的収容所 SLON」(1923-39)が組織される。これ以降、過去に記念・顕彰され続けた歴史を排除・抑圧し、新しく記憶すべき歴史を作り出すことが必然的に求められた。SLON では 20 年代の末まで、それらの実験が行われている。その理念は、29 年に SLON を訪問した M.ゴーリキーの旅行記などに読み取ることができ、その実践は SLON に開設された博物館、囚人による演劇などの文化活動に見ることができる。しかし、現実をほとんど伴わない夢に終わった理念は、記憶されることが不可能であった。

39 年に収容所が閉鎖され、軍事施設となった島には軍関係者が新たに移住し、収容所について語ることはタブーとされた。ほとんど記憶のない島となったソロフキでは、戦後、旧修道院建造物を史跡として顕彰することが試みられる。ソ連期を通してソロフキは、北ロシアの歴史・文化に関心を持つ人々を惹きつけ続けていた。こうして 67 年には、現在まで続く国立歴史・建築・自然博物公園が創設される。しかし博物公園が「祖国の偉大なる遺産」の継承を目的としたにもかかわらず、結局それは国家的な記念・顕彰の対称にならなかった。

ところが、1990 年のソロヴェツキー修道院の復活、また 91 年のロシアの復活を経て、ソロフキは「祖国の歴史」を体現する地として記憶される。このようなソ連期とポスト・ソヴィエトの記憶のあり方を比較することで、ロシアという国家の「公的記憶」が形成されるために必要な要素を論考したい。

(たかはし さなみ、北海道大学大学院生)

【C40】ソヴィエトプロパガンダポスターの政治性と芸術性 グスタフ・クルーツィスの場合

大武 由紀子

革命直後にアヴァンギャルド芸術家としての創作活動を開始したラトビア人クルーツィス(1895-1938)は、第 1 次 5 ヶ年計画の国家を挙げてのパトスに押し上げられながら、創作のジャンルを書籍等の挿絵から政治的プロパガンダ・ポスターへと大きく転換させている。30 年代に入ると、彼は押しも押されぬスターリン翼賛ポスターのキイ・パーソンとなった。彼が創作活動において一貫して追求したものは、次元の異なる写真を複数組み合わせ・衝突させて差異を際立たせる手法であり、それは第 1 次世界大戦直後、ドイツ・ダダイズムの芸術家達が「フォトモンタージュ」と名付けた西欧モダニズムの手法と一致していた。若きクルーツィスは、すでに 1918 年作品「反革命に一撃を」の中に写真を用いており、以後 1938 年に「ラトビア民族主義グループ」に関係したとして粛清されるまでの 20 年間、創作の中心は、フォトモンタージュによる時代感覚の描出であった。彼の作品群は自らの時代とその変転を的確に反映するものであり、それはまた一部の評者から「カメレオンの」と批判されるところでもあった。

5 ヶ年計画の開始及びスターリン独裁という時代の変化とともに、芸術の分野においては、モダニズムを活動の源とする諸芸術は「フォルマリズム(形式主義)」として激しい批判を浴びることになる。社会主義リアリズムの定立以後、ポスターの分野において、その嗜好の変化は明瞭である。衝突から調和へ、差異から同調へという流れの中でフォトモンタージュは時代の余計物になっていった。35 年以後、クルーツィスのポスター制作は途絶えている。このような状況にあって、彼はフォトモンタージュ擁護を目的として、これまで自分の歩んできた道を見渡しながら、評論『実験の権利』(未完、35-36 年)の執筆を試みている。乱雑に書き記された裏表 11 枚の用紙には、本来のフォトモンタージュ擁護の論旨の合間に、彼の本心が鋭い言葉となって現われている。またクルーツィス夫人であるクラギナ(彼女自身もポスター画家)は日記を残しており、そこにはポスターの仕事をしたこの時代のクルーツィスの日々が書き残されている。この 2 つの史料を手がかりに、『実験の権利』執筆当時のクルーツィスが、自分自身の現在及び過去の芸術活動をどのように見、どのように位置付けていたかを、作品を交えながら考察したい。

(おおたけ ゆきこ、北海道大学大学院生)

【C41】ロシア特別教育における就学指導・教育相談のあり方をめぐって

白村 直也

近年の日本では、特別な教育的ニーズを持つ児童に対する支援のあり方を巡って、注目すべき提起が幾つもなされている。中でも市町村教育委員会に置かれる就学指導委員会の機能面、それに属するメンバー構成のあり方が捉え直され、諸機関で展開される教育相談と就学指導との緊密な連携、また就学後も個別の教育支援計画に沿ったフォローアップが目指されている。

本報告では、上記の日本の今後の展望を踏まえ、ロシアを対象に以下の点を考察する。つまり、ロシアの教育行政は、教育相談と就学指導との連携をどのように整備し、またどのような模索状態にあるのかという点である。その際のキーワードとして、日本の就学指導委員会の機能の大部分を等しく担うと考えられる「心理-医療-教育委員会」を提示し、法令上の規定を通じてその一端を解明することを目的としている。

ロシアにおいては、連邦法、教育省通達により、日々の教育相談に関しては、心理、医療、教育等の専門家を委員会メンバーとして組み込むことにより、日常的に対応させようとしている。そしてその過程で得られた調査結果は、特別教育施設等への就学、在宅学習の組織、そして諸条件の設定等の委員会の結論に反映される。またその後の診断の確認や修正に対応させようとしている。

しかし、一方で州や地区レベルの委員会の規定からは、当該レベルの委員会の活動が、上記の法令上の規定を履行するものであるか、という点に疑問が残る。

ロシアにおける問題点としては他に、以下の点が挙げられる。つまり、日本では長期・大局的な個別の支援計画を念頭に置き、教育、福祉、医療、労働等が一体となった相談、支援体制の整備が市町村の教育委員会等に求められている。一方、ロシアにおいてはそのような長期・大局的な支援という視点、中でも就学時から労働へといった、就学後への連携した支援体制の構築といった観点が希薄ではないかと考えられる。連邦単一プログラム「2000-2005年障害者に対する社会的援助」においても、障害者の生活の質の良化、リハビリテーション産業の国内市場の発展、リハビリテーション活動の効果の上昇等、それを通じた就労に関する点に重きが置かれ、目的とされている。現在のロシアにおいては、就学から就労への移行に際しての委員会を含めた諸機関との連携、いわゆる労働との連携も含め長期的な支援計画が非常に見えにくい状況にあるといえる。(はくむら なおや、東京外国語大学大学院生)

【D- 】パネルディスカッション：ポータブルな祖国
ユダヤ・ディアスポラの文化とスラヴ

企画：楯岡求美(神戸大学)

地理的な領域としての祖国から追放され、離散する歴史を生きてきたユダヤの人々は、自己のアイデンティティを宗教・言語とともに音楽やダンスといったリズムや、ユダヤ文化のイメージを視覚化する絵画として共有し、継承している。いわば、文化という形で見えない祖国を共有し、携帯し、世界中に拡散してきたと言えるだろう。特にスラヴ世界との関わりに焦点をあて、スラヴ文化の多様性に寄与したユダヤ文化について考察を行う。

司会：諫早勇一(同志社大学)

継母ロシアへの片思い ユダヤ・ロシア文化関係史序説に向けて

赤尾光春(北海道大学)

200 年以上にわたるユダヤ人とロシアとの関係は、20 世紀末に生じたユダヤ人による未曾有の「エクソダス」に象徴されるように、政治・思想史的には不幸なロマンスであったかもしれないが、文化・社会史的にはかならずしもそうとは限らない。

シオニズム運動とその帰結としての現代イスラエル社会、そしてアメリカを中心とする今日のディアスポラ・ユダヤ社会には、ロシアで培われた文化的遺産が疑いもなく脈打っている。一方、ロシア・ソビエト社会のあらゆる分野で活躍した無数のユダヤ人の知的貢献なくしては、今日のロシア文化を想像することもできない。ロシアという豊穡な文化的土壌を、狭義の「ロシア文化」の枠組みを越えて、より立体的に理解するためには、こういった二者択一的な文化史観を克服し、ユダヤ文化とロシア文化のダイナミックな関係を再構成する作業が不可欠となる。

本報告では、以下に挙げる人々を紹介しながら、「継母ロシアへの片思い」という、ユダヤ・ロシア文化関係史を通じて見られる文化的パラダイムの発展過程を俯瞰してみたい。

終末と破局の予感 ハシディームが経験した「大祖国戦争」：リマノフのメナヘム・メンデル(1745-1815) / リャディのシュヌール・ザールマン(1745-1812)

魂の彷徨 ロシア版ハスカラーの行方：レフ・マンデリシュターム(1809-89) / マックス・リリエンブルーム(1843-1910)

出自への不安 19 世紀ロシア文学の中のユダヤ性：アフナーシー・フェート(1820-92) / セミョー

ン・ナドソン(1862-87)

民族への回帰 ポグロムが生んだ二つのユダヤ民族主義：シュロモ・アンスキー(1863-1920) / ゼエヴ(ウラジーミル)・ジャボチンスキー(1880-1940)

二つの受難をめぐって ソビエト帝国における民族消滅のはかなき夢：ボリス・パステルナーク(1890-1960) / ワシーリー・グロスマン(1905-64)

シャガールとクレズマー音楽(音楽実演付き)

樋上千寿(大阪大学, オルケストル・ドレイデル主宰)

1887 年、ベラルーシのヴィテプスクのユダヤ人共同体で生まれたマルク・シャガールは、20 代半ばでエコール・ド・パリの仲間入りを果たし、その才能を開花させた。97 歳で亡くなるまで画家人生の大半をフランス国内で過ごしたため、20 世紀フランスの巨匠というイメージで捉えられがちである。しかしその作風は、東欧のユダヤ教文化を背景に持ちながら、ロシア文化および西欧のキリスト教文化とも関わっており、非常に複雑な象徴表現を用いているため、解釈する者をしばしば混乱させてきた。「色彩の魔術師」「愛と幻想の画家」などの形容は、表層的な評価である同時に、彼の芸術の捉え難さをも物語っている。

ヴィテプスクで受け継がれた伝統的な東欧ユダヤ教文化と習慣は、町の風景や動物たちなどの姿を借りて彼の作品に頻繁に描かれている。なかでも音楽家たちの姿はとりわけ多く描かれた。そのヴァイオリン弾きやクラリネット奏者などが演奏する音楽「クレズマー」は、かつて東欧のユダヤ教の結婚式で演奏されていた。人々は祝う気持ちと同時に、神への感謝、神と共にいることの喜びを、「クレズマー」の演奏と踊りで、全身全霊で表した。東欧ユダヤ人の固有の言語で紡がれた「イディッシュ民謡」は、彼らの辿った道のりの険しさ、それを乗り越える強靭さが深い哀愁と薄日のような光を伴って謡い継がれ、その旋律は民族を問わず人々の心を震わせずにはおかない。

シャガールの絵には、彼ら音楽家の姿と一緒に、彼らが奏でるメロディー、リズムそのままの生気がみなぎっている。ポータブルな文化としての「クレズマー」を媒介に、国境と文化圏を越えるべきシャガール芸術の本質に少しでも迫ることができれば幸いである。

コメント：三谷研爾(大阪大学, 関西チェコ/スロバキア協会副会長)
角伸明(関西大学)

【D- 】パネルディスカッション：「その後」のフォルマリストたち ロシア・フォルマリズム再考

企画・司会：野中進(埼玉大学)

1928年の時点でフォルマリズムは「もはや過去の現象として語られなければならない」、「フォルマリストの数だけフォルマリズムが存在する」と宣告された(メドヴェージェフ『文芸学の形式的方法』)。だが近年、彼らの理論的・芸術的遺産の再検討が進むにつれ、研究者の関心は「その後」の彼ら、「フォルマリストの数だけのフォルマリズム」に向かっている。本パネルでは、20年代後半から30年代にかけてのシクロフスキイ、トゥイニャーノフらの文学論、映画論に焦点を合わせ、彼らがどのように自分たちの研究・創作活動を拓こうとしていたかを考える。以下、各報告の主旨である。

シクロフスキイの『オブチミズムの探求』をめぐって
野中進(埼玉大学)

1931年にシクロフスキイは『オブチミズムの探求 Поиск оптимизма』と題する本を出版した。有名な「科学的誤謬の記念碑」(1930)直後の単行本という点から考えても、もっと注目を浴びてもよい作品であるが、従来のフォルマリズム、シクロフスキイ研究ではほとんど言及されない。だがそこで彼が試みたジャンル上の新基軸、またヤコブソンの論文「その詩人たちを浪費した時代について」(1930)との隠れた論争など、見るべきものを多く含んでいる。パネル全体の趣旨説明とつなげつつ、この作品について紹介的説明を行う。

シクロフスキイの映画論について

佐藤千登勢(上智大学)

1920年代、純粋に運動を複製・再生する映画の能力にシクロフスキイは惹かれていた。だがその後、複数の静止画の回転を連続した運動と認識する人間の知覚の問題が、彼の映画論の主眼となる。それはやがて知覚と連想作用、そしてイメージと記号の問題へと展開を見せた。1939年以後、映画の領域でも長い沈黙に入ったシクロフスキイは、雪どけ期に再び「プロット сюжета」の概念を適用して映画論を発表する。この中で、プロットはもはやストーリーと混同されるものでも、ストーリーに対置されるものでもなかった。映画の細

部(意味付けされた事物)に宿って視覚的イメージを喚起し、再び認識され、想起されるテーマが「プロット」となった。以上の観点から、60年にわたる彼の映画論の変遷を概観する。

映画(論)における「意味」 B.エイヘンバウム「映画文体論の諸問題」と IO.トゥイニャーノフ「映画の基礎について」

八木君人(早稲田大学大学院生)

『映画の詩学』(1927)に収められた二つの論文、B.エイヘンバウム「映画文体論の諸問題」と IO.トゥイニャーノフ「映画の基礎について」を比較・対照ながら読解し、映画における「意味」へのアプローチの仕方を検討することにより、両者の映画論の相違を確認する。その相違は、標語的に述べれば、エイヘンバウムが「意味」を実現するメディアとして映画を捉えるのに対し、トゥイニャーノフは、「意味」が生成するメディアとして映画を捉えていることにある。根本的にはそこから導かれることになる、映画に関する両者の見解の相違を踏まえ、トゥイニャーノフの映画論の特殊性を指摘する。彼はスクリーンの表象を、「意味を持つ事物 смысловая вещь」として捉えるのだが、それは、言語をモデルとするようないわゆる「意味」とは異なるといえる。この場合、トゥイニャーノフにおける「意味を持つ」は、「差異化される」と同義となり、カメラ・アングルや照明といった映画の「文体論的」要素は、「差異化する」手段として語られることになる。

ドミナントを考える

中村唯史(山形大学)

フォルマリストたちの文学史的論考は、現在のポスト・コロニアリズムとは異質だが、ロシア文学におけるコーカサス表象について考えるうえでの大きな示唆となる。彼らの思考が、基本的に、境界とその複数性、流動性、ヒエラルキーに関するものだからだ。トゥイニャーノフの『エルズルム紀行』について(1936)他を対象として、境界という観点からフォルマリズムの再読を試みる。

コメント：長谷川章(秋田大学)

(Room A)

- A02 S. Akikusa. Nabokov's Natural Idiom: From "First-Rate" Russian to "Second-Rate" English
- A03 A. Furukawa. The Luxuriating Revolution: Plants Symbolizing the World in the Works of A. Platonov
- A04 К. Накадзава. Тема нового человека в романе Вс. Иванова «У»
- A05 С. Самицу. Образ Москвы в романе Б. Пастернака «Доктор Живаго»
- A06 Ф. Сэки. Философия пола и любви в России и роман Е. Зяткина «Мы»
- A07 К. Исихара. О первой биографии М. Булгакова
- A08 Н. Кавахара. Образ фланера и произведения Ф. М. Достоевского
- A09 М. Коидэ. О теории релятивного познания в романе «Братья Карамазовы»
- A10 Р. Кидэра. Проблема церкви и государства в «Братьях Карамазовых»
- A11 Y. Sato. The "Woman Question" in Dostoevsky's "A Writer's Diary"
- A12 А. Ямадзи. Переосмысление главы «Фаталист» с точки зрения композиции романа М. Ю. Лермонтова «Герой нашего времени»
- A13 Т. Накадзава. Реформа стихосложения В. К. Тредиаковским и предглиннинская музыкальная культура
- A14 К. Цунода. Кантемир и русское стихосложение в настоящее время (Читая «Письмо Харитона Макентина»)

(Room B)

- B15 Г. Шатохина. Прогноз перцептивных ошибок у японцев, изучающих русский язык
- B16 Ю. Клочков. Ознакомление с грамматическим материалом японских учащихся на уроке русского языка
- B17 С. Сивакова. Методический опыт оптимизации процесса обучения русской разговорной речи по пособиям японских авторов
- B19 Y. Urai. The Word Formation System in the Russian Literary Language during the Prose Formation Period: the Case of Radishchev, Karamzin and Pushkin
- B20 N. Imani. Reconsideration of Radishchev's Treatise "On Man"
- B21 С. Какубари. Толстой и XVIII век («Детство» Л. Н. Толстого и «Сентиментальное путешествие» Л. Стерна)
- B22 А. Мидзуно. «У + родительный падеж» как одно из выразительных средств possessora частей тела (в сопоставлении с дательным падежом)
- B23 Т. Ногуты. Соотношение падежного синкретизма и падежной иерархии в современном русском языке
- B24 Y. Nanjo. An Analysis of the Structural Pattern in Contemporary Russian of [verb + preposition v/vo + animate noun] Where the Animate Noun in the Plural Appears in the Nominative Case
- B25 К. Ариидзуми. Понижение государственных границ: к истокам «проблемы северных территорий»
- B26 М. Акао. The Russian Intelligentsia's Attitudes toward Antisemitism during the Last Decades of Czarist Russia
- B27 G. Koshino. "Alternative History" and Image of Empire in Contemporary Russian Literature

(Room C)

- C28 Ц. Цукада. Жизнь протоиерея Александра Дэ
- C29 Т. Кусака. Обычай и суд Древней Руси и их отражение в «Русской Правде»
- C30 Т. Ямада. Реальность быличек о ходячих покойниках
- C31 К. Юноки-Оиэ. Балалайка в досуге русской деревни в 1930-1940 гг.: на материалах экспедиций в Нерехтский район Костромской области в 2001-2003 гг.
- C32 К. Emura. The Recording Eyes: The Images of Belomor Canal in "USSR in Construction"
- C33 E. Hirano. *Ballets Russes's* "Firebird": A Sexy and Seductive Woman Created Based on Russian Folktales
- C34 Х. Огура. Танец и память в творчестве Ремизова
- C35 С. Маэда. Современная русская женская литература и «феминизм»
- C36 S. Takayanagi. Fictions by Russian Women Writers in the 1960s
- C37 Y. Ueda. The Literature about Literature: An Essay on S. Krzhizhanovskii's "Bookmark"
- C38 F. Kondo. F. Sologub's "The Created Legend"
- C39 С. Такахаси. Поворот общественной памяти Советской властью и его провал

- C40** Y. Otake. G.Klutsis “The Right to Experiment:” Defending the Use of Photo-Montage
- C41** N. Hakumura. Attendance at School Guidance and Education Consultation in Russia
(Room D) Panel Discussion
- D-α** Culture as Portable Motherland: Interrelations between Jewish Diaspora and Slavic Culture (K. Tateoka, M. Akaō, Ch. Hinoue et al.)
- D-γ** Russian Formalists after Formalism (S. Nonaka)
S. Nonaka. On Shklovsky’s “In Search of Optimism”
T. Сато. О теории кино В.Шкловского с 20-х годов по 80-е годы XX века
Н. Яги. «Смысл» в кино(теории): «Проблемы киностилистики» Б.Эйхенбаума и «Об основах кино»
Ю.Тынянова
T. Nakamura. On the Dominant